今宿バイパス関係
埋蔵文化財調査報告Ⅳ

福岡県前原市大字東所在古墳群の調査報告

前原市文化財調査報告書

第　48　集

1993

前原市教育委員会

今宿バイパス関係

埋蔵文化財調査報告Ⅳ

福岡県前原市大字東所在古墳群の調査報告

前原市文化財調査報告書

第　48　集

遺跡周辺の航空写真（1／5,000）

（昭和58年8月　株式会社アジア建設コンサルタント撮影）

方格T字鏡（実大）

序

昭和47年度より建設が開始されました今宿バイパスも21年の歳月をかけて本年３月26日全線開通の運びとなりました。長年待ち望まれておりました同バイパスの開通は誠に喜ばしいことであるとともに、工事関係者の方々のご努力には改めて敬意を表する次第であります。

今宿バイパスの建設に先立ち当教育委員会では昭和62年度～平成２年度に発掘調査を実施したところでありますが、本書は昭和63年度～平成元年度に実施した東真方古墳群Ｃ群の調査報告書であります。

本書が文化財保護思想の普及・啓蒙ならびに古代史の解明に少しでもお役に立つならば、これにまさる喜びはございません。

なお、末筆ではありますが文化財の保護にご理解を頂き、発掘調査に御協力頂きました建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所には心より感謝申し上げます。

平成５年３月31日

前原市教育委員会

教育長　樗　木　昭　生

例　　言

1．本書は今宿バイパス建設に伴い昭和63年度～平成元年度に実施した東真方古墳群Ｃ群の調査報告書である。

2．発掘調査および整理作業は建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所からの委託を受けて前原市教育委員会が行った。

3．本書に掲載した地形測量図および遺構実測図の作成は角　浩行・林　覚（前原市教育委員会）、高田とよみ、塩田純子が行った。

4．本書に掲載した遺物実測図の作成は角が行った。

5．本書に掲載した図面の製図は角、末益真奈美、楢崎尚子、中原晴香が行った。

6．本書に掲載した遺構写真の撮影は角が行ったが、遺物写真の撮影は岡紀久夫、遺跡全景写真の撮影は㈲空中写真企画によるものである。

7．本古墳群から出土した赤色顔料については本田光子氏（福岡市埋蔵文化財センター）、成瀬正和氏（宮内庁正倉院事務所）に分析を依頼し玉稿をいただいた。

8．巻頭に掲載した航空写真は株式会社アジア建設コンサルタントの撮影によるものである。

9．本書で示した方位は磁北である。

10．本書の執筆は角が行った。

11．本書の編集は末益・楢崎・柴田由美子の補助を受けて角が行った。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査にいたる経過 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 5
Ⅲ．調査の記録 …… 9
　1．古墳群の概要 …… 9
　2．１号墳 …… 9
　　(1)墳　丘 …… 9
　　(2)主体部 …… 13
　　(3)出土遺物 …… 14
　3．２号墳 …… 16
　　(1)墳　丘 …… 17
　　(2)主体部 …… 18
　　(3)出土遺物 …… 18
　4．その他の遺構と遺物 …… 18
Ⅳ．まとめ …… 21
Ⅴ．付　論 …… 24

挿　図　目　次

Fig. 1　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査地点位置図（1／50,000） …… 4
Fig. 2　東真方古墳群Ｃ群の位置と周辺の遺跡（1／50,000） …… 6
Fig. 3　遺跡周辺の地形（1／2,500） …… 7
Fig. 4　１号墳墳丘測量図（1／100） …… 10
Fig. 5　周溝断面実測図（1／40） …… 11
Fig. 6　周溝内遺物出土状況実測図（1／30） …… 11
Fig. 7　１号墳主体部実測図（1／30） …… 12
Fig. 8　１号墳出土遺物実測図Ⅰ（1／1,2／3） …… 13
Fig. 9　１号墳出土遺物実測図Ⅱ（1／3） …… 15
Fig. 10　２号墳墳丘測量図（1／100） …… 16
Fig. 11　周溝断面実測図（1／40） …… 17
Fig. 12　２号墳主体部実測図（1／30） …… 17
Fig. 13　２号墳出土遺物実測図（1／3） …… 18
Fig. 14　溝断面実測図（1／40） …… 18

Fig. 15　土坑実測図（1／40）…… 19
Fig. 16　出土遺物実測図（1／3）…… 20

図　版　目　次

PL. Ⅰ　遺跡周辺の航空写真（1／5,000）
PL. Ⅱ　方格T字鏡（実大）
PL. 1－a　遺跡全景Ⅰ（南から）
　　－b　遺跡全景Ⅱ（南西から）
PL. 2－a　1号墳全景Ⅰ（南から）
　　－b　同　上　Ⅱ（上から）
PL. 3－a　1号墳主体部Ⅰ（南から）
　　－b　同　上　Ⅱ（北から）
PL. 4－a　1号墳主体部Ⅲ（西から）
　　－b　周溝内遺物出土状況Ⅰ（土器1　北から）
PL. 5－a　周溝内遺物出土状況Ⅱ（土器3、5　南から）
　　－b　同　上　Ⅲ（土器2、4　南から）
PL. 6－a　方格T字鏡出土状況Ⅰ（西から）
　　－b　同　上　Ⅱ（近景　北から）
PL. 7　1号墳出土遺物
PL. 8－a　2号墳全景（上から）
　　－b　2号墳主体部Ⅰ（南西から）
PL. 9－a　2号墳主体部Ⅱ（南東から）
　　－b　2号墳出土遺物
PL. 10－a　溝
　　－b　土　坑2
PL. 11－a　土　坑3
　　－b　土　坑4

表　目　次

Tab. 1　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査実績
Tab. 2　出土土器観察表

付　図　目　次

Fig. ①　調査区全体図（1／200）

Ⅰ．はじめに

1．調査にいたる経過

東真方古墳群Ｃ群は、今宿バイパス路線内25地点として試掘調査の対象としていた地点である。昭和63年11月に試掘調査を実施し溝状の遺構が認められたので、発掘調査の実施について福岡国道工事事務所との協議を行った。協議では同事務所からバイパスの終点側から発掘調査を実施してほしいとの要望がだされたため、先に試掘調査を実施し遺跡が認められていた26地点（東真方遺跡、東真方古墳群Ａ群）の発掘調査を優先することとした。このため東真方古墳群Ｃ群の発掘調査については期間の関係から同年度内に終了することが不可能となったため、次年度に継続することとした。

本古墳群の発掘調査は東真方遺跡、東真方古墳群Ａ群の調査終了後直ちに着手した。調査開始は平成元年３月初旬であったが、年度変りの時期にさしかかり関係事務処理に時間を取られることとなり現場の作業は思うようには進まなかった。しかしそれらも４月中旬には終了し、その後の作業は順調に進み６月中旬には無事にすべての調査を終了した。

整理作業はバイパス路線内の調査がすべて終了した後の平成４年度に実施した。

2．調査の組織

東真方古墳群Ｃ群の発掘調査および整理作業における関係機関は以下の通りである。

	昭和63年～平成元年度（発掘調査）	平成４年度（整理作業）
建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所		
所　　長	朝倉　　肇（～平成元年9月）	清水　英治
	中垣　光宏（平成元年10月～）	
副所長（事務）		中富　　清
副所長（技術）	境　　鉄雄（昭和63年度）	宮崎　暢隆
	岩田　秀人（平成元年度）	高場　正富
工務課長	谷本　誠一（昭和63年度）	
	肥後橋譲治（平成元年）	
用地第二課長	原崎　俊美（昭和63年度）	
	九谷　元由（平成元年度）	
調査課長	岩屋信一郎	増田　博行（第一課長）

	昭和63年～平成元年度（発掘調査）	平成４年度（整理作業）
建設監督官	中島　貞市	
調査課調査係長	後藤　昌隆	
同　調査係	中原　博海	
	竹下　卓宏	
調査第一課設計係長		松岡　　隆
同　　設計係		徳重　正義

前原町教育委員会

総括	教　育　長	河原　吉美
	文化課長	岸原　重美
	文化課文化財係長	吉村　耕治
庶務	同　文化振興係長	中園　俊二
調査	同　文化財係	角　　浩行

なお、平成４年４月前原町役場の機構改革により部が設置され、その後10月１日には市制施行により前原町が前原市となった。本年度の業務は以下の体制で行った。

前原市（町）教育委員会

総括	教　育　長	樗木　昭生
	教育部長（兼務文化課長）	菊竹　利嗣（平成４年４月～１１月）
	文化課長	清水　義弘（平成４年１２月～）
	文化課文化財係長	川村　　博
庶務	同　文化振興係長	吉村　耕治
整理	同　文化財係	角　　浩行

末筆となりましたが赤色顔料の分析について玉稿をいただきました福岡市埋蔵文化財センターの本田光子氏ならびに宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏、調査および整理作業員として御協力いただいた方々には心より感謝申し上げます。

Tab. 1　今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査実績

	地点番号	遺跡名	所在地	調査所要区間			調査面積（トレンチ除く）				備考
				長さ（m）	幅（m）	面積（m）	62年（㎡）	63年（㎡）	元年（㎡）	2年（㎡）	
今宿バイパス	12－2	池田東遺跡	糸島郡前原町大字池田	500	45	22,500				18,000	
	13－1	有田古野遺跡	〃　有田・篠原	90	45	4,050				4,050	
	13－2	原口遺跡(3次)	〃　有田	110	45	4,950				4,950	
	13－3	原口遺跡(2次)	〃　有田	120	45	5,400				5,400	
	14－2	上鑪子南遺跡	〃　有田	100	50	5,000			800		
	14－3	上鑪子遺跡	〃　有田	100	50	5,000			300		
	15	多久口木古墳群	〃　多久	120	50	6,000	1,800				
	16		〃　多久	10	50	500					遺構なし
	17		〃　多久	60	50	3,000					〃
	18		〃　多久	70	80	5,600					〃
	21		〃　多久	200	80	16,000					〃
	22		〃　多久	150	60	9,000					〃
	23		〃　東	110	50	5,500					〃
	24		〃　東	250	60	15,000					〃
	25	東真方古墳群C群	〃　東	220	50	11,000		1,800			H1～2年度継続調査
	26	東真方古墳群A群	〃　東	275	80	22,000		1,150			
		東真方遺跡						550			
多久北新地線	No. 1	富長尾遺跡	〃　富	95	40	3,800			750		
	No. 2		〃　富	75	20	1,500					遺構なし
	No. 3		〃　多久・富	80	40	3,200					〃
	No. 4		〃　多久	75	45	3,375					〃
	No. 5		〃　多久	77	25	1,925					〃
	No. 6		〃　多久	30	25	750					〃
	No. 7	多久沼田A遺跡	〃　多久	80	25	2,000			1,250		
	No. 8	多久沼田B遺跡	〃　多久	325	20	6,500			500		

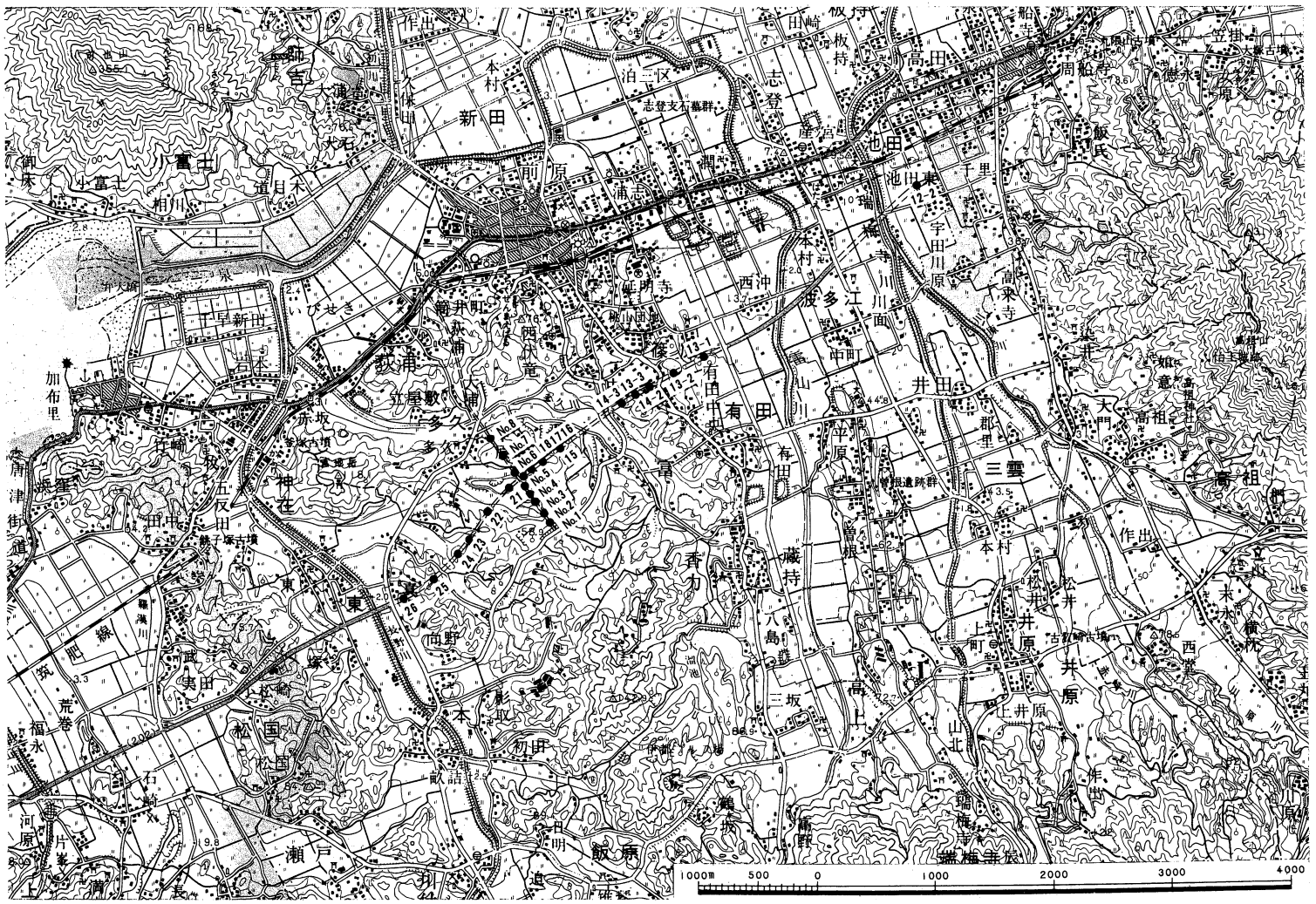


Fig. 1 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査地点置位図（1／50,000）

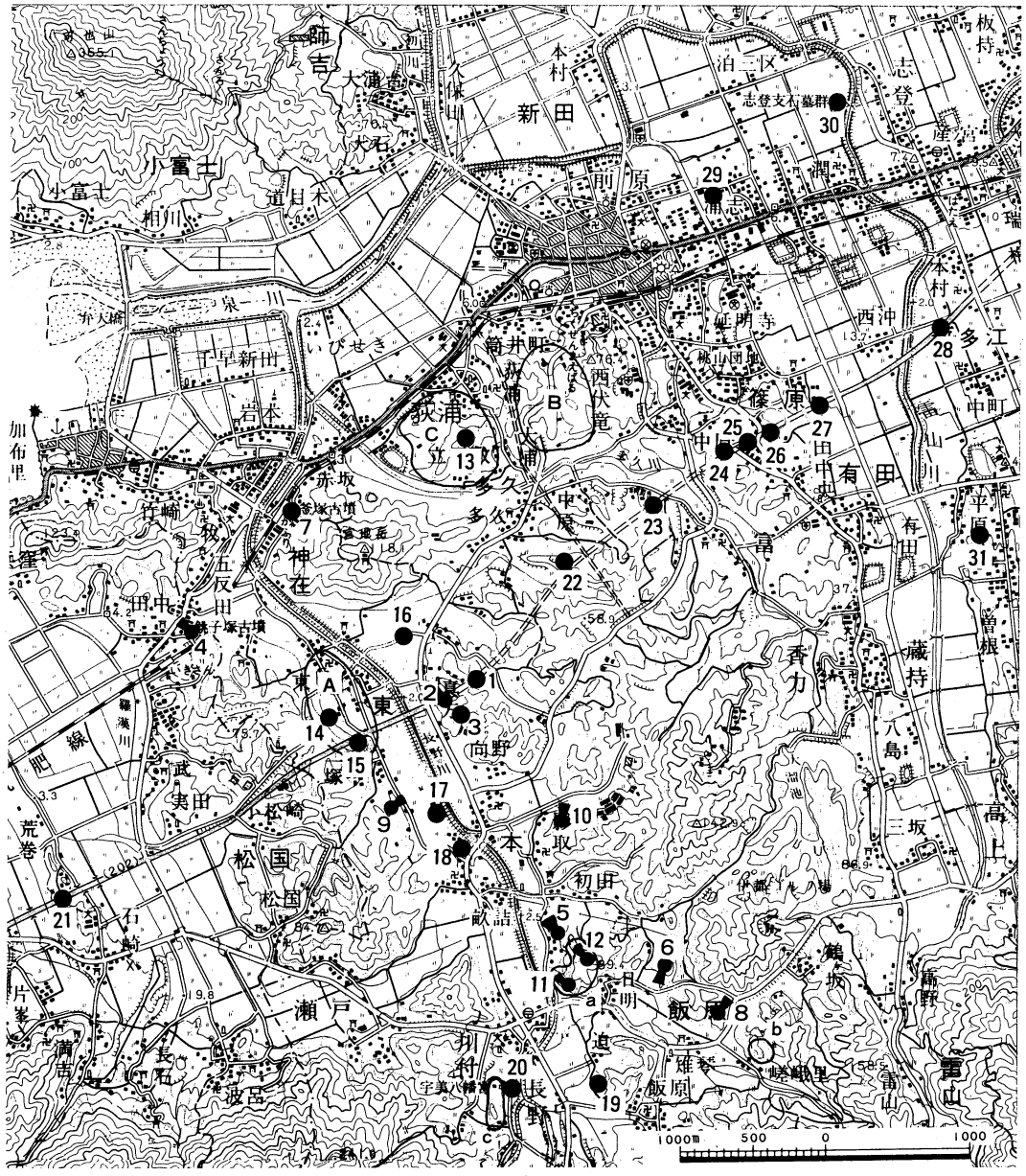
Ⅱ. 位置と環境

東真方古墳群Ｃ群は前原市の西部を北に流れる長野川中流右岸の丘陵上に位置する。丘陵は標高32ｍを測る。本市の西部には雷山山系から北に派生する標高50ｍ前後の丘陵が広がっており、農業生産の基盤となる沖積地に乏しい。長野川、多久川の流域にはややまとまった沖積地があるが、それも両側に丘陵が迫り河川を中央に細長く存在するのみで、広がりにおいて東部の雷山川、瑞梅寺川流域とは比肩すべくもない。狭小な沖積地は丘陵地帯に八手状に貫入し複雑な地形を呈している。本古墳群は長野川からさらに入りこんだ狭小な沖積地に面する丘陵上に位置する。

長野川流域の遺跡については近年、ほ場整備事業にともなう発掘調査により次第に明らかになりつつある(註１)。古墳時代の遺跡についてみると、まず前期古墳として著名な一貴山銚子塚古墳(小林他編 1952)がある。全長103ｍの前方後円墳で竪穴式石室より舶載の方格規矩四神鏡、長宜子孫内行花文鏡、仿製三角縁神獣鏡等10面の鏡が出土している。糸島地方で最大の規模を誇り当地の盟主的古墳である。４世紀後半の築造である。本林崎１号墳(岡部 1991)は全長25ｍ以上の前方後円墳で主体部は盗掘により破壊されているようであるが、箱式石棺の可能性が高い。墳裾の箱式石棺から連弧文鏡が出土し、その脇の小石棺(？)から土器が出土している。出土した土器から４世紀中葉に位置付けられている。日明13号墳は全長45ｍの前方後円墳で主体部は不明であるが、後円部西側には小型の竪穴式石室をもつようである。時期は４世紀末～５世紀初頭と考えられている。その他東五反田遺跡(註２)からは前期のものと思われる箱式石棺が出土している。

中期では釜塚古墳(石山 1981)がある。低湿地に造られた大型の円墳で墳丘の直径は約56ｍ、周溝を含めると直径は約72ｍに達する。古式の横穴式石室を主体部にもつ。墳丘は２～３段築成で葺石は確認されていないが、埴輪は出土している。時期は５世紀中葉と考えられている。日明17号墳は全長30ｍの帆立貝式の前方後円墳で段築、葺石をもつ。主体部等は不明であるが５世紀代のものと考えられている。その他日明古墳群、長嶽山古墳群、鶴ケ坂古墳群等に径30～20ｍの円墳を含む５世紀代の古墳が存在する。

後期では東二塚古墳(糸島古文化学会 1990)がある。全長45ｍの前方後円墳で周溝と周堤帯をもつ可能性がある。長野川流域においては盟主的な古墳である。主体部は盗掘により完全に破壊されているようであるが、横穴式石室であると考えられる。後円部南側から須恵器が表採されており６世紀前半の築造と考えられている。東真方古墳群Ａ群１号墳(角 1992)は全長20ｍ以上の前方後円墳で横穴式石室を主体部にもつ。出土した須恵器から見ると６世紀中頃の築造と考えられる。横枕古墳は全長40ｍ、日明３号墳は全長35ｍ、日明11号墳は全長40ｍ、日明16号墳は全長25ｍのいずれも横穴式石室をもつ６世紀代の前方後円墳で、日明３号墳からは円



1 東真方古墳群C群	2 東真方古墳群A群	3 東真方古墳群B群	4 一貴山銚子塚古墳	5 本林崎１号墳
6 日明13号墳	7 釜塚古墳	8 日明17号墳	9 東二塚古墳	10 横枕古墳
11 日明３号墳	12 日明11号墳	13 荻浦立石１号墳	14 東下田遺跡	15 東太田遺跡
16 東五反田遺跡	17 東高田遺跡	18 本田孝田遺跡	19 飯原門口遺跡	20 川付宮ノ前遺跡
21 石崎曲り田遺跡	22 奈良尾遺跡	23 多久口木古墳群	24 上鑵子遺跡	25 原口遺跡（２次）
26 原口遺跡（３次）	27 有田古野遺跡	28 波多江遺跡	29 浦志遺跡A地点	30 志登支石墓群
31 平原遺跡	a 日明古墳群	b 鶴ヶ坂古墳群	c 長嶽山古墳群	
A 東遺跡群	B 大浦遺跡群	C 荻浦遺跡群		

Fig. 2 東真方古墳群Ｃ群の位置と周辺の遺跡（１／50,000）

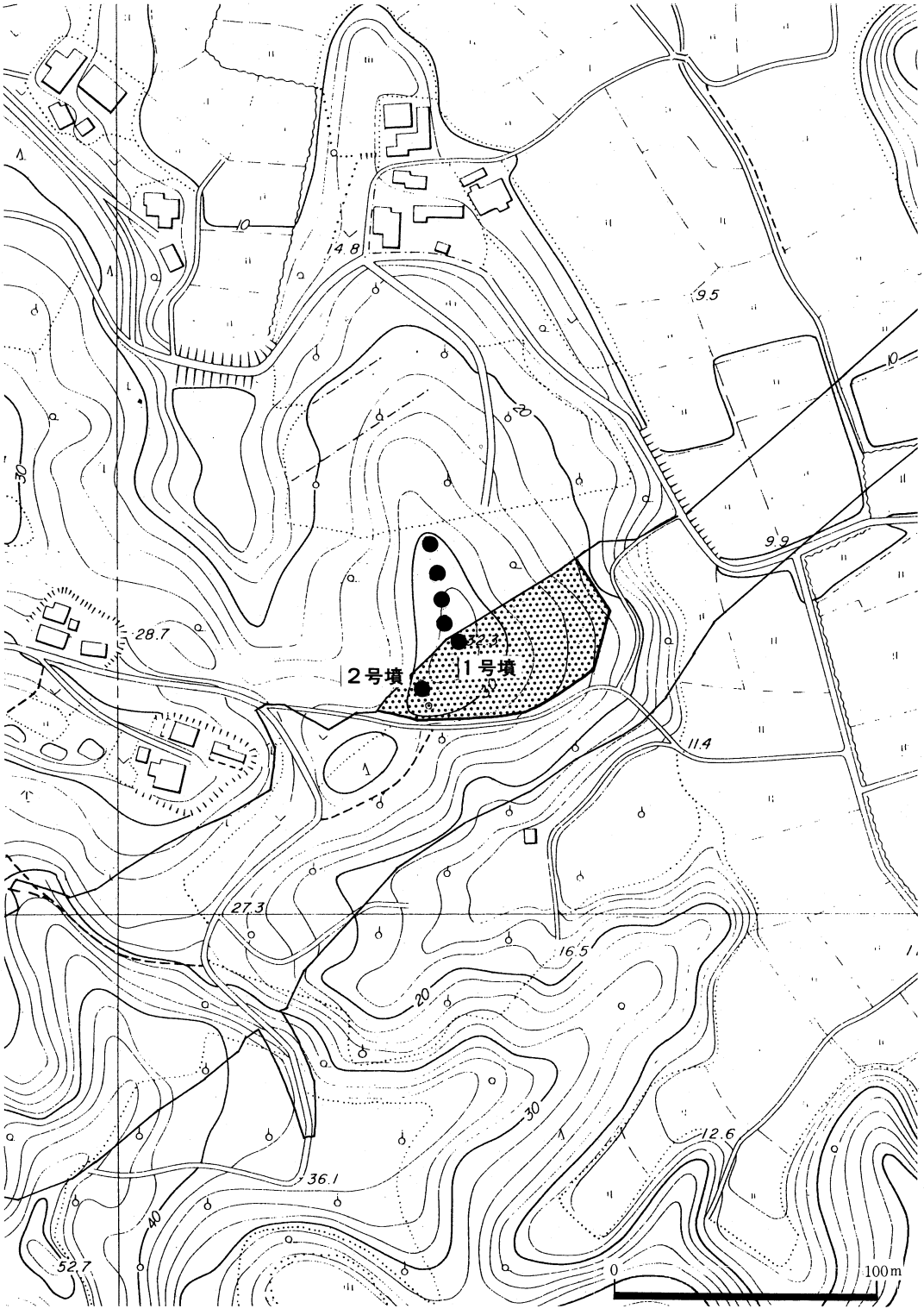


Fig. 3 遺跡周辺の地形（1／2,500）

筒埴輪の出土が知られている。その他日明古墳群、長嶽山古墳群、東真方古墳群B群、宮地岳山麓に群集墳が存在する(註3)。

一貴山銚子塚古墳、釜塚古墳を除けばいずれも小型の古墳であり、前二者はいずれも下流域に位置している。

一方集落は長野川下流より東下田遺跡、東太田遺跡、東五反田遺跡、東高田遺跡、本田孝田遺跡、飯原門口遺跡、川付宮ノ前遺跡(註4)がある。東下田遺跡は前期から中期前半にかけての集落址で、水鳥形土器、陶質土器、鉄滓などが出土している。東太田遺跡は出土遺物から見ると後期の集落址と考えられる。東五反田遺跡、東高田遺跡(岡部 1990)は前期の集落址である。本田孝田遺跡(林・角 1993)は集落本体は未確認であるが、大溝(自然の谷か?)より弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が大量に出土している。このことより近接して前期の集落址が存在することは間違いない。飯原門口遺跡は前期の集落址、川付宮ノ前遺跡は後期の集落址である。集落遺跡の数は多いが長期間存続する遺跡は見られず、規模も大きいとは言えない。現在の発掘調査の成果からすると小規模な集落が生成廃絶を繰り返していた状況が読み取れる。

以上のような集落の状況は長野川流域の地理的環境による農業生産基盤の脆弱さに起因するものなのかもしれない。現在長野川流域の沖積地にはほぼ全域にわたり水田が広がっているが、近世以前には長野川は頻繁に流路を変えていたようで、水田可耕地もかなり限定されていたことが考えられる。しかし、そのような地域であるにも関わらず多くの前方後円墳が存在することは注目すべきであり、当地の政治的重要性を物語ると考えられるが、今後解明すべき課題である。

(註)

1. 昭和58年から開始され現在継続中、長野宮ノ前遺跡(岡部 1989)、東高田遺跡(岡部 1990)については報告書既刊、その他は現在整理中である。
2. 昭和62年度調査、その他弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴式住居、中世の環濠居館等が　検出されている。
3. 特に註記無きものは柳田報文(柳田 1982)による。
4. 長野宮ノ前遺跡報告書(岡部 1989)に概要記載。

(引用文献)

石山　　勲　1981『釜塚』前原町教育委員会

糸島古文化学会　1990「付載　東二塚古墳」『長野川流域の遺跡群Ⅱ』前原町教育委員会

岡部　裕俊編　1989『長野川流域の遺跡群Ⅰ』前原町教育委員会

岡部　裕俊　1990『長野川流域の遺跡群Ⅱ』前原町教育委員会

小林行雄・有光教一・森貞次郎編1952『一貴山銚子塚古墳の調査報告』福岡県教育委員会

角　浩行　1992『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ』前原町教育委員会

林　覚・角　浩行　1993『本田孝田遺跡・東スス町遺跡』前原市教育委員会

柳田　康雄　1982「第2章　糸島の古墳文化」『三雲遺跡Ⅲ』福岡県教育委員会

Ⅲ. 調 査 の 記 録

1. 古墳群の概要

本古墳群には今回調査を実施した２基と未調査の４基の計６基が確認されている。その配置は標高約32mの丘陵最高所に円形周溝墓１基（１号墳）が位置し、北および南西に派生する丘陵にそれぞれ４基、１基（２号墳）が従うように位置している。

１号墳は径約８mの円形周溝墓で主体部は箱式石棺である。石棺内から小型の方格規矩鏡が出土しており、その占地からみても本群の盟主的な古墳であることが窺える。２号墳は径約６mの円形周溝墓（？）で主体部は小型の竪穴式石室である。１号墳、２号墳についてはバイパスの路線内に位置していたため発掘調査を行った。他の４基については調査中に行った周辺地区の踏査によって墳丘状の高まりが認められ、そのうちの１基については石棺らしい石組が確認されたため古墳と判断した。これらは１号墳から北に派生するなだらかな丘陵の尾根上に並ぶように存在している。丘陵は果樹園造成のため途中で削られており、削られた部分にも古墳が存在したことは充分に考えられる。発掘調査を行っておらず踏査時の表採品もなかったので、詳細については不明である。

2. １ 号 墳

本墳は標高約32mをはかる丘陵の最高所に位置している。南側はやや緩やかな斜面となっており、北および南西に丘陵が派生している。現状では丘陵全体に杉の植林が行われていたが、古墳周辺は南側が削平されている他は地形はそれほど大きくは改変されていないようであった。踏査時には古墳の存在は確認できなかったが、試掘調査により周溝の一部が検出されたため発掘調査を行った。なお試掘時に表土を除去した時点で周溝が出ていたにもかかわらず、なお掘り下げてしまい断面を観察して初めて溝の存在に気付いた。このため周溝と墳丘の一部をとばしてしまう結果となり、観察の甘さを反省している。

(1) 墳　　丘（Fig. ４～６　ＰＬ. ２、４、５）

墳丘は地山に溝を掘ることで、その範囲を区画している。現状では顕著な地山整形は認められなかったが、主体部の箱式石棺が表土直下から検出されたことから考えると若干の削平を受けているようであり不明と言わざるをえない。ただ、地形を見るかぎりでは丘陵の頂部を若干削りだす程度で墳丘を整形したものと考えられる。盛土も検出されなかったが、墳丘の規模からすると大規模なものではなかったと考えられる。墳丘は円形を呈し、直径は7.5mである。

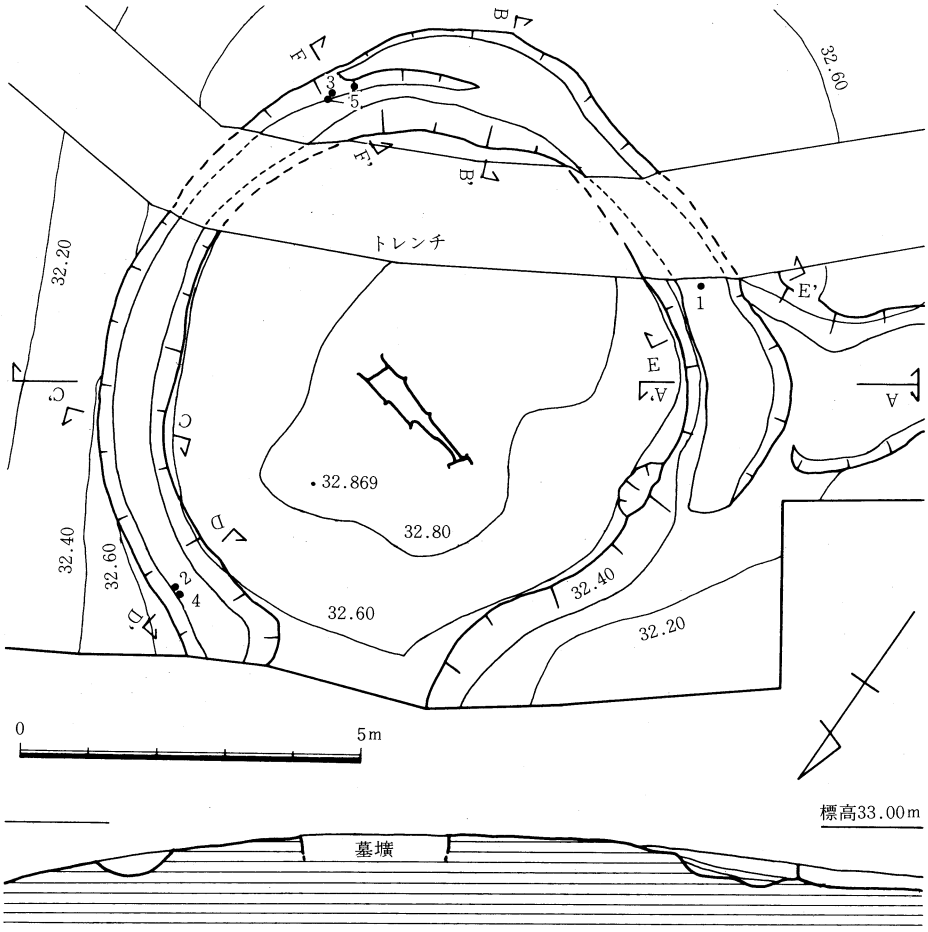


Fig. 4　1号墳墳丘測量図（1／100）

周溝は円形に巡り、現況で幅0.9m～1.6m、深さ30cm～50cmである。南側と南西側に一部広がる部分があり、南側については二段掘りとなっている。周溝は一周せず西側から北側にかけて1／4程は存在しない。西側から北西側にかけてはやや急斜面となっているため、周溝を掘る必要がなかったものと考えられる。北側については意識的に掘り残して、陸橋部を造り出している。周溝の埋土は最下層に淡黒褐色土が、その上に淡赤褐色土または淡赤灰褐色土、暗赤灰褐色土の順で堆積している。最下層の厚みは場所によって異なっている。

周溝内から土器が出土しているが完形に近いものは少なく、量的にもわずかである。完形に近いものは周溝の南西側、南側、北東側から出土している。土器1は小型の壷で溝底から20cmほど浮いた状態で出土しており、あたかも据えられたように正立に近い状態である。土器3、

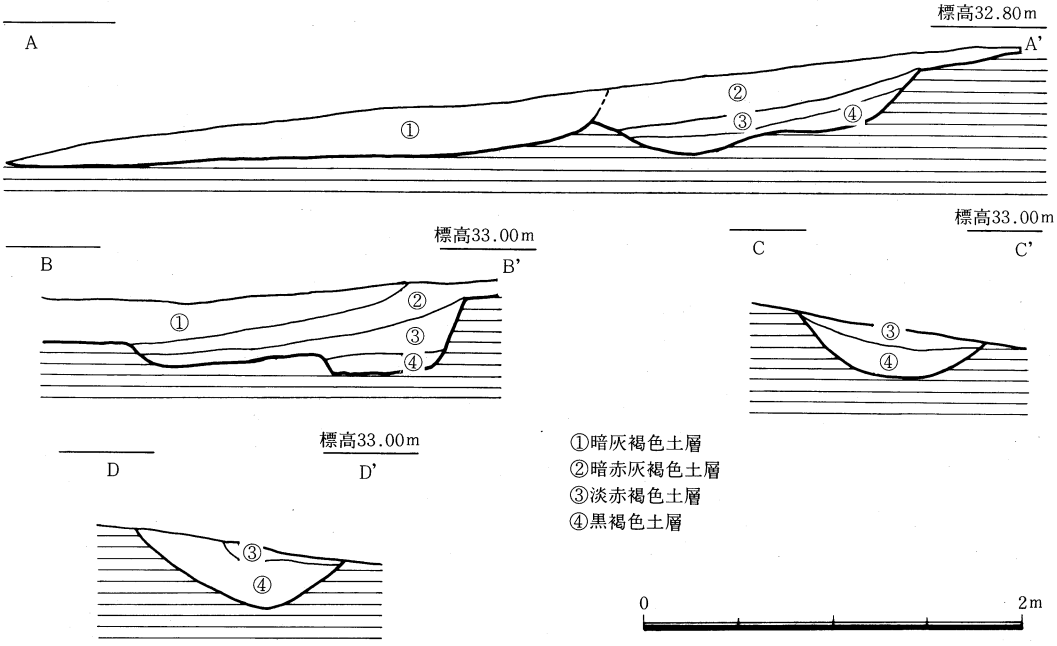


Fig. 5　周溝断面実測図（1／40）

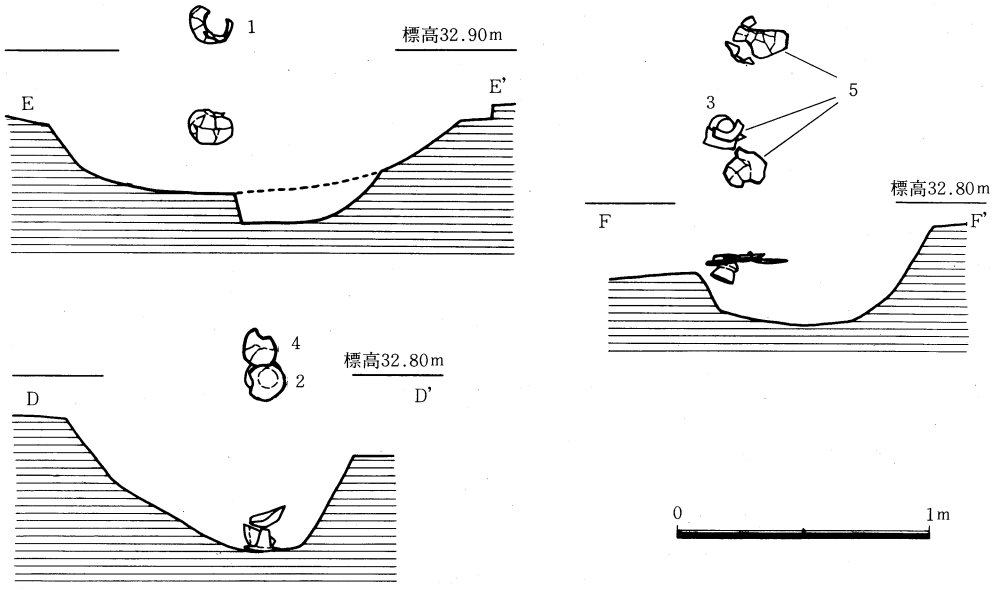


Fig. 6　周溝内遺物出土状況実測図（1／30）

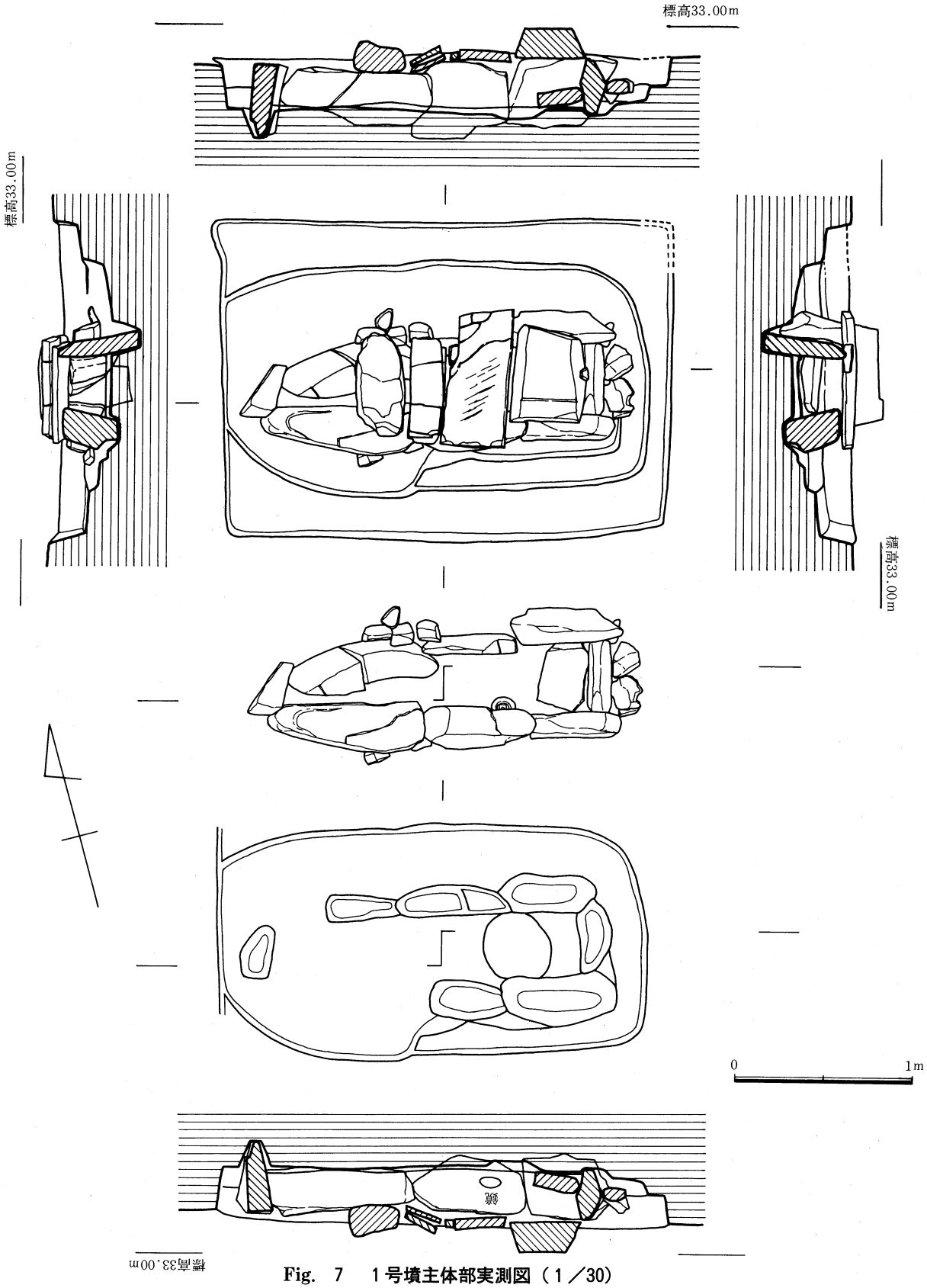


Fig. 7　1号墳主体部実測図（1／30）

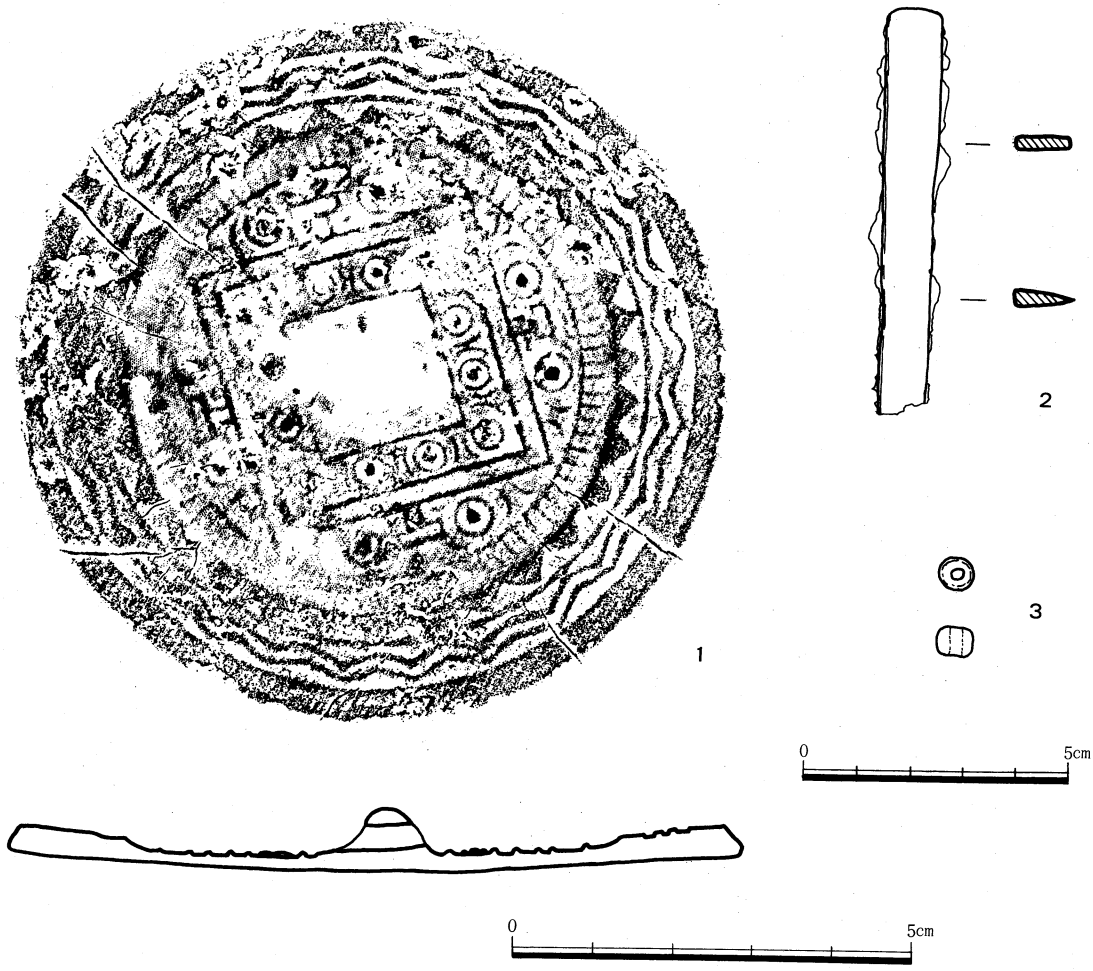


Fig. 8　1号墳出土遺物実測図（1／1、2／3）

5は小型丸底壷と二重口縁壷でこれも溝底から10㎝～20㎝ほど浮いた状態で出土しているが、こちらは転落したような状態で出土している。土器2、4は高杯と鉢でありこれは溝底に接した状態で出土しており、これも据えられたような状態で出土している。

以上まとめると1号墳は径約7.5mの円形周溝墓で、周溝は幅0.9m～1.6m、深さ30㎝～50㎝であり、周溝を含めた外径は10mである。

(2) 主体部（Fig. 7　PL. 3、4、6）

主体部は墳丘のほぼ中央に位置する箱式石棺である。墓壙は2.55m×1.8mの長方形で、墓壙のほぼ中央をさらに掘り込み石棺を埋置している。蓋石が5枚遺存しているが、うち2枚は重なっている。西側の部分は抜き取られたのであろうか存在しない。東端と西端には花崗岩を使用しており、東端はきれいに面取りした厚みのある割石を西端には形を整えた程度（？）の割石を使用している。その他は安山岩質の板石である。石棺の規模は内法で長さ175㎝、幅40

cm、深さ25cmであり、主軸はN－77°－Wである。棺内東側に枕石と思われる板石が置かれていることから頭位は東であると考えられる。石棺は両側壁にそれぞれ3枚、両小口にそれぞれ1枚の石材を使用しており、小口を両側壁で挟み込む方法を採っている。両小口と側壁東側部分の石は板状に近いが西側部分の石はほとんど加工されていないようである。石材は東側の小口と南側壁東端に片岩系の石材を、その他は花崗岩を使用している。枕石は厚さ約10cmの花崗岩の板石でありわずかに傾斜している。地山に礫混じりの暗赤褐色土を厚さ2～3cm程敷いて床面を形成している。棺内には赤色顔料が塗られていたようで赤味を帯びていた。

棺内南壁に接して銅鏡1面が出土している。完形品で鏡面を下にして、やや南に傾斜した状態で検出された。位置的には被葬者の胸部左側にあたる。鏡の周辺からは木質などの有機物は確認されなかった。その他は棺内埋土より刀子片1、ガラス玉1が出土したのみである。

(3) 出 土 遺 物（Fig. 8、9　PL. 7）

石棺内出土遺物

銅　鏡(1)　小型の仿製方格規矩鏡で、内区文様のうちL・Vを欠くいわゆる方格T字鏡である。面径9.2cm、外区厚3mm、内区厚2mm、平縁で2mmの反りをもつ。外区文様は外側より複線波状文、鋸子文である。内区文様は外周に櫛歯文を配し、それに内接して方格を配置する。方格のそれぞれ一辺にT字文を配し、その両側に乳をもつ。四神は完全に省略されているが、わずかに乳の脇に蕨手状の文様がみうけられ、その名残りを止めているようである。方格内には12個の乳をもち、その内側をさらに方形に区画し、その頂点内側にも蕨手状の文様がみられる。鈕はやや鋳崩れており、鈕孔も方格の一辺に垂直とはならず若干ずれている。銘は見られず、文様も全体的にシャープさに欠ける。方格の頂点に一部湯が回っていないのか、楕円形の小さなくぼみがみられる。表面は錆のため剝離している部分もあるが全体に残りは良い。

刀　子(2)　遺存長7.8cmをはかる。茎～刃部の破片である。

ガラス玉(3)　濃いブルーを呈し、径6.05mm、厚さ5.25mm、孔径1.65mmである。

周溝内出土遺物

土　器（1～5）　1は小型の壷である。口縁部を欠くがほぼ完形である。遺存高15.5cm、胴径16.8cmである。口縁はやや開き、端部は丸くおさめると思われる。胴部は若干肩が張る球形で、底部は丸底である。外面は風化しているが調整は、口縁部は横方向のナデ、胴部は外面が斜めまたは横方向のハケ、内面は頸部直下からケズリである。2は高杯で遺存高17.7cm、脚部径12.1cmである。出土時には完形であったが、非常にもろく、取り上げ時に杯部が細片となり接合することができなかった。脚筒部はややエンタシス状のふくらみを持つ。外面は風化が激しく、調整は不明である。脚筒部内面は横方向のケズリで、屈曲部以下はケズリの後ナデている。3は小型丸底壷である。完形で器高7.2cm、口径9.7cmである。口縁部はやや内弯気味に広がり、かなり発達している。調整は口縁部内外面ともハケ、胴部は内外面ともナデである。4は椀で

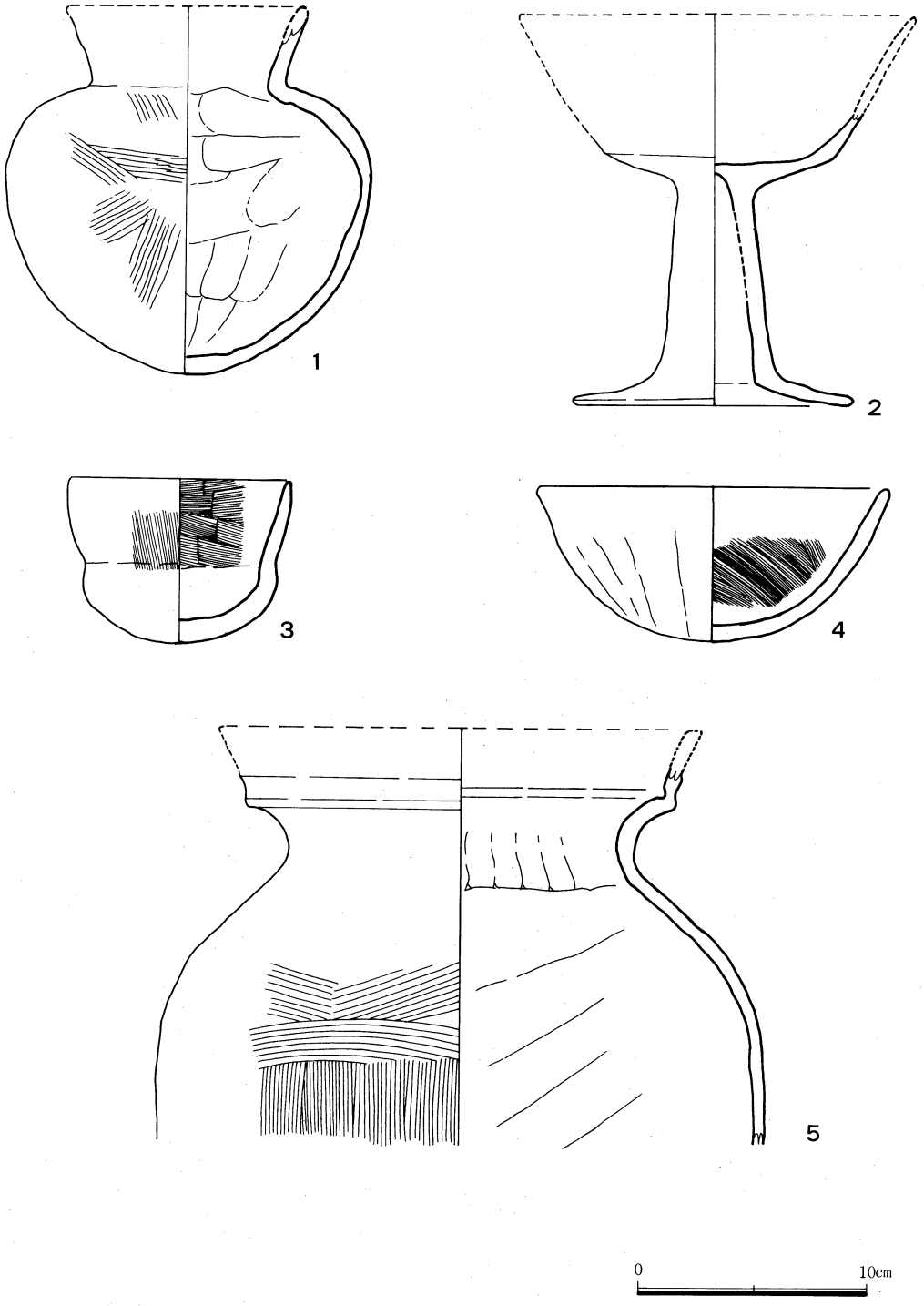


Fig. 9　1号墳出土遺物実測図Ⅱ（1／3）

ある。完形で器高6.7cm、口径15.4cmである。調整は口縁部内外面とも横方向のナデ、胴部は外面がケズリ、内面がハケである。5は二重口縁壷である。口縁と胴部下半を欠く。胴径26.3cmである。調整は外面が口縁部～肩部は横方向のナデ、肩部以下はハケ、内面は頸部がナデ、頸部直下からケズリである。

3．2号墳

本墳は丘陵の最高所から南西に派生する丘陵上に位置している。標高は約30mを測る。古墳周辺は北西側と南東側がかなり削られている。南西側に前方部状のテラスが認められるがこれ

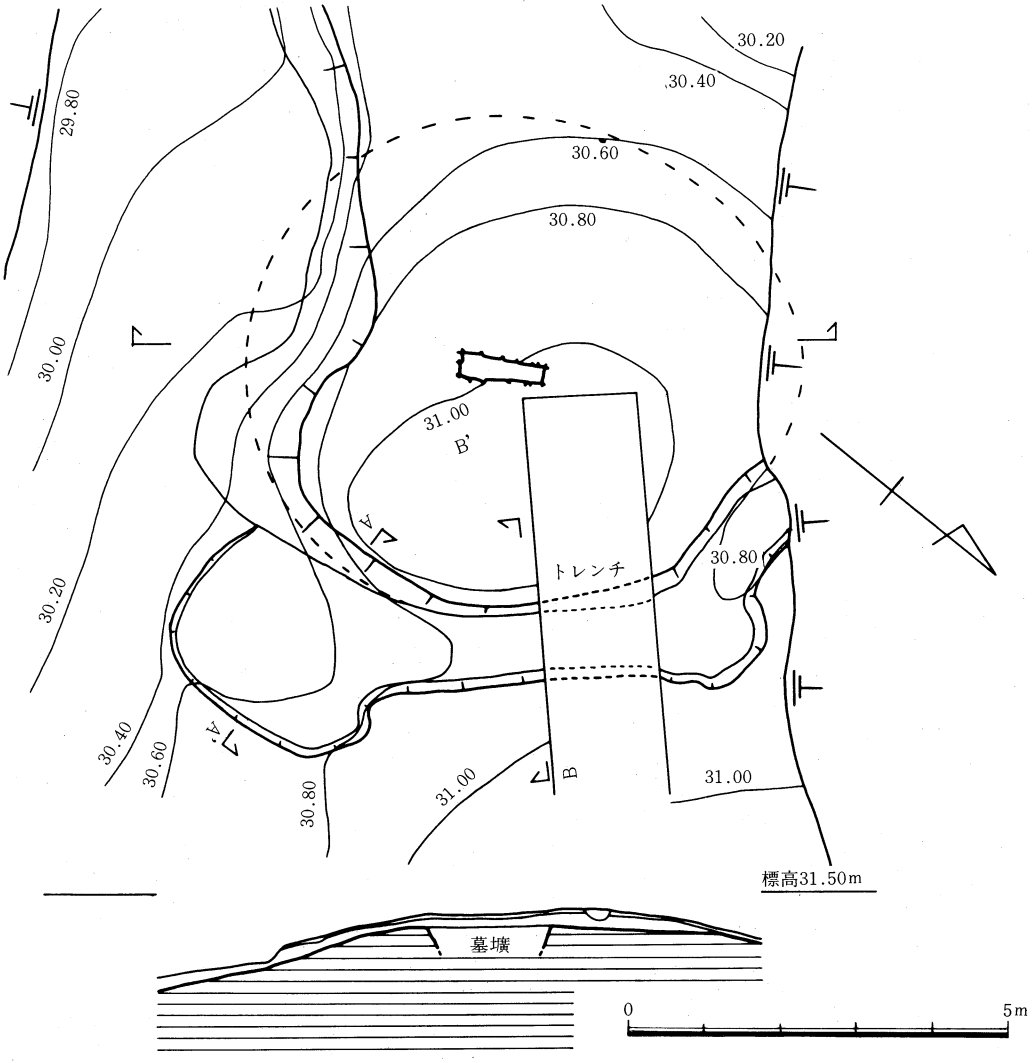


Fig. 10　2号墳墳丘測量図（1／100）

も削平によるものであろう。本墳も踏査時には古墳とは判断されなかったが、試掘調査により石室の一部が検出されたため発掘調査を行った。

(1) 墳　丘(Fig. 10、11 PL 8)

墳丘は削平がはげしく現状では地山整形は認められなかった。盛土も削平されてしまったのか検出することができなかった。北東側には周溝が検出され、それにより墳丘を区画している。周溝は幅

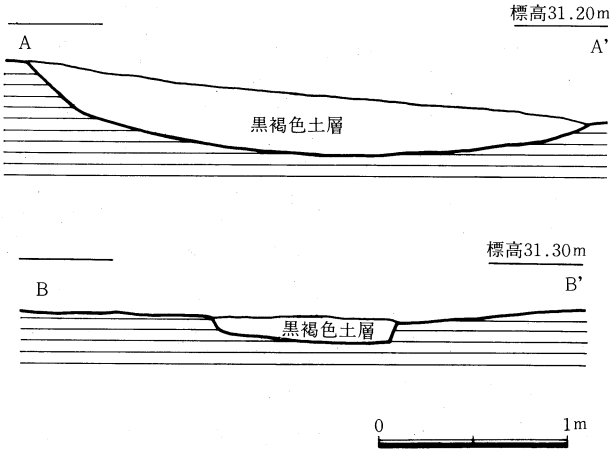


Fig. 11　周溝断面実測図（1／40）

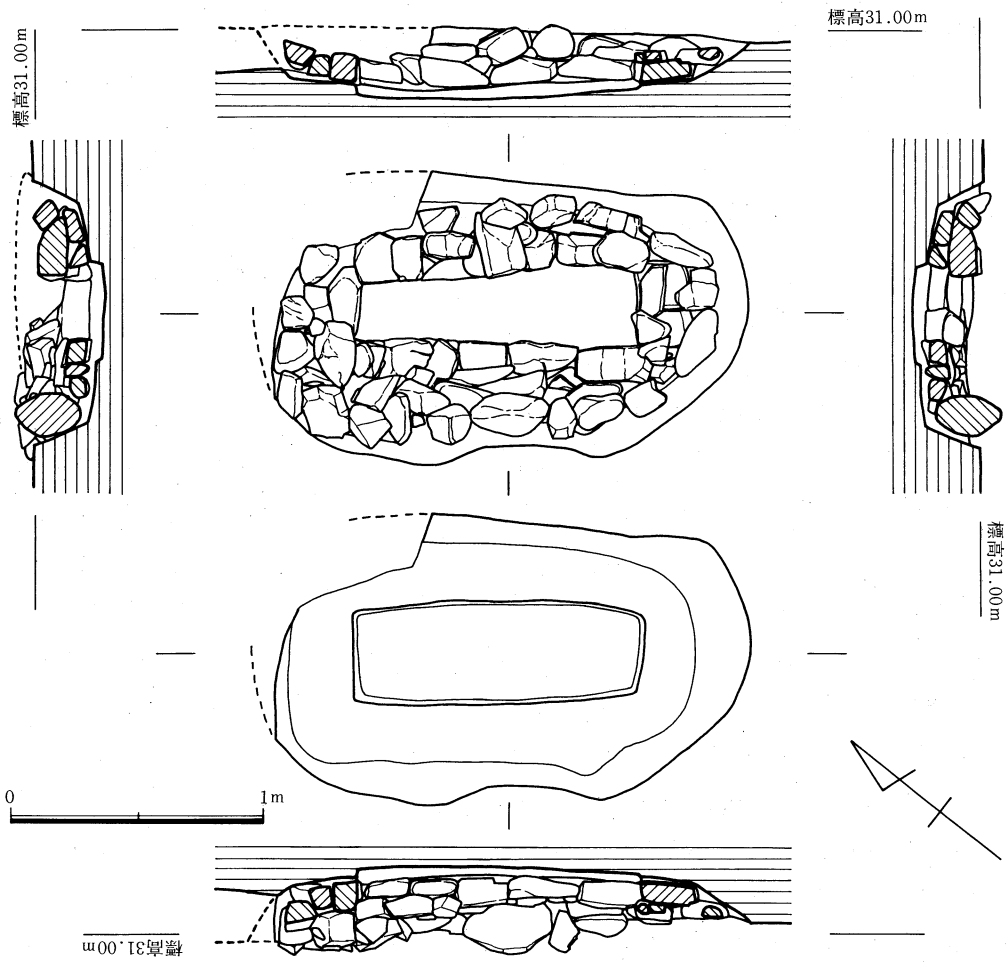


Fig. 12　2号墳主体部実測図（1／30）

１m前後で、深さ約10cmが残存するのみである。東側でかなり広がっており、これについては別の遺構が切りあった可能性も考えられるが、土層の観察では確認できなかった。地形を見ると周溝は一周せず南西側～北西側については削りだしによって墳丘を整形したと考えられる。墳裾は北西側と南東側については削平により不明であるが、西～南西側については標高30.60m付近が墳裾となると考えられる。これから推定すると墳丘は長径7.4m、短径6.7mの楕円形を呈していたものと考えられる。墳丘部分から土器片が出土している。

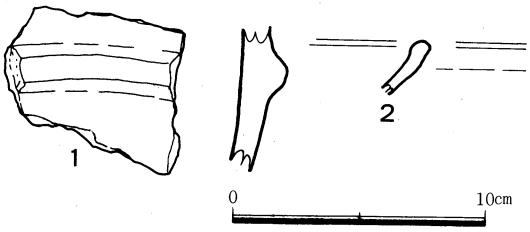


Fig. 13　2号墳出土遺物実測図（1／3）

(2)　主体部（Fig. 12　PL. 8、9）

主体部は墳丘のほぼ中央に位置する小型の竪穴式石室である。墓壙は一部試掘時に破壊してしまったが現況で1.86m×1.15mを測り、楕円形を呈する。深さは約20cmが残存する。蓋石は全く残存しない。石室の規模は内法で長さ110cm、幅33～22cmであり、主軸はN－38°－Wである。南東側が北西側に較べ幅が広いことから、頭位は南東にとると考えられる。石室は上部が破壊されており石積みは１～２段を残すのみである。石材はほとんどが転石のまま使用されているが壁面は面をそろえており、面取りしたものも見られ作りは丁寧である。床面は墓壙底を掘込んで形成しているが、敷石等の特別な施設はない。石室内には赤色顔料が塗られていたようで、若干赤味を帯びていた。石室内からの出土遺物はなかった。

(3)　出土遺物（Fig. 13　PL. 9）

１は弥生後期の二重口縁壷の胴部突帯の破片である。調整は内外面ともにナデである。２号墳南西のテラス部分の出土である。２は甕の口縁であろうか。調整は内外面ともに横方向のナデである。主体部東側の出土である。

4．その他の遺構と遺物

(1)　遺　構（Fig. 14、15　PL. 10、11）

溝　調査区東側の斜面で３条を検出した。中央にやや大きめの溝があり、その両側に小溝がある。中央の溝は長さ約６m、幅約50cm、深さ約20cm、小溝はそれぞれ長さ約４m、幅約40cm、深さ約15cm、長さ約１m、幅約30cm、深さ約10cmである。出土遺物はなかった。

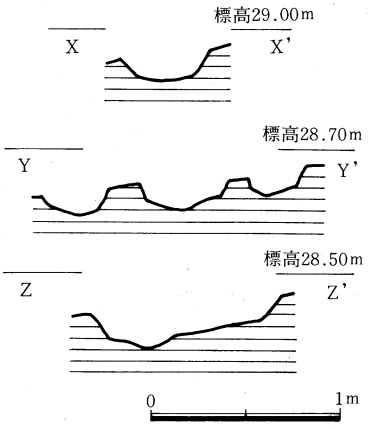


Fig. 14　溝断面実測図（1／40）

土　坑　１は１号墳南西側で周溝に接して検出された。

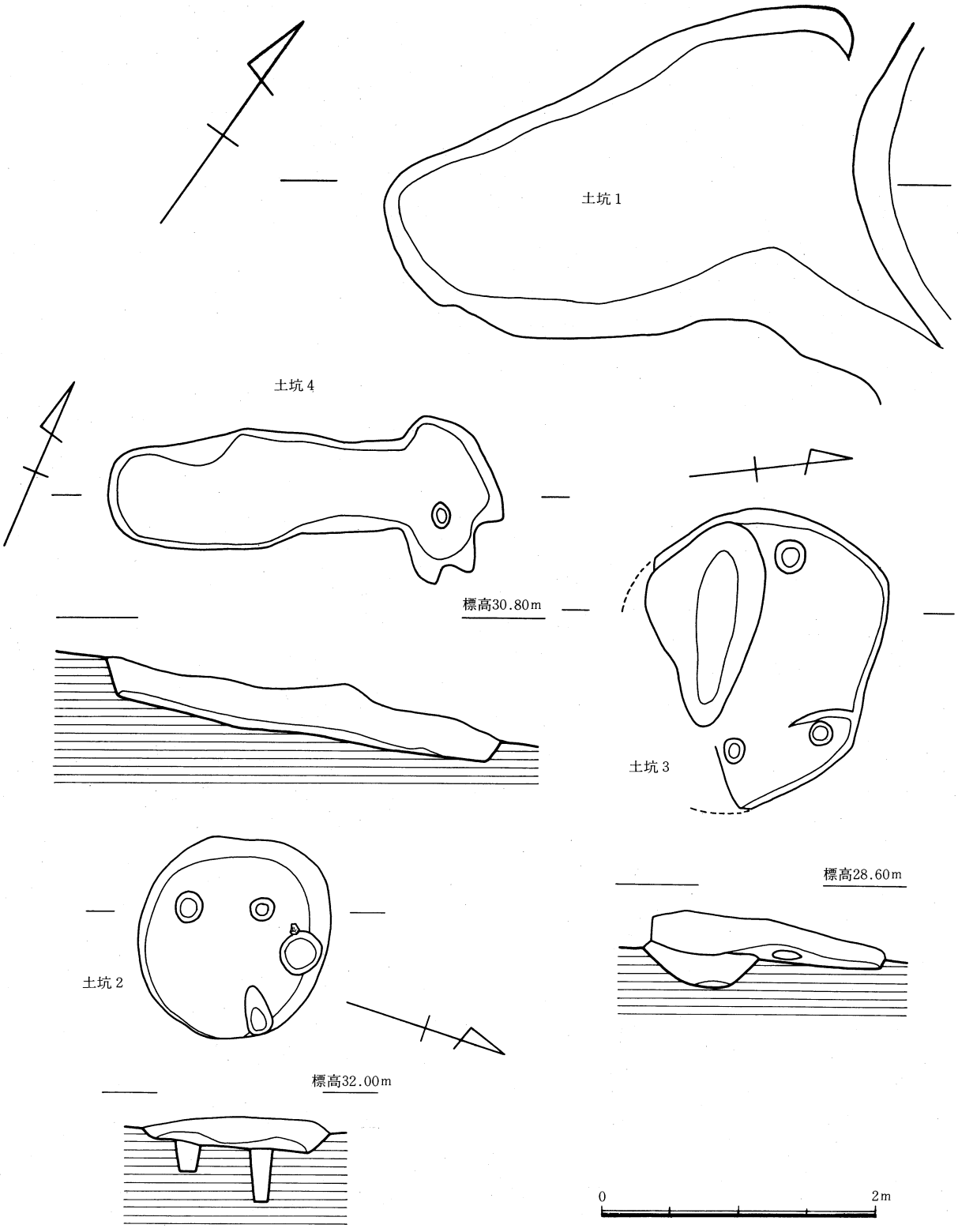


Fig. 15　土坑実測図（1／40）

長さ3.54m、幅2m、深さ26cmである。出土遺物はなかった。2は1号墳北東側で検出した円形の土坑で、径144cm、深さ20cmである。中にピットが4個ある。土器片が出土したが、弥生後期のものがみられる。3は調査区北東側で検出した不整形の土坑で、一部試掘時に削ってしまった。長さ2.2 m、幅1.8m、深さ50cmが遺存する。中に小土坑1とピット3をもつ。出土遺物はなかった。4は1号墳南東側で検出した不整形の土坑で、長さ2.9m、幅65～120cm、深さ30cmが遺存する。出土遺物はなかった。

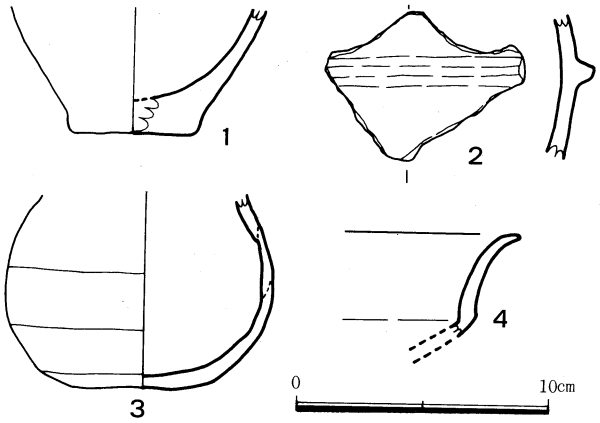


Fig. 16　出土遺物実測図（1／3）

ピット　1号墳北東側と南側で検出した。北東側には列をなして並ぶものがみられるが、建物となるものはなかった。南側のものは並ぶようなものもなく、多くは木根による撹乱と考えられる。

(2)　出土遺物 (Fig. 16)

1は小型の甕の底部である。調整は内外面ともにナデである。遺存高4.9cm、底径5.1cmである。2は壷の胴部の破片であろう。調整は内外面ともにナデである。弥生後期の二重口縁壷であろう。1、2ともに土坑2の出土である。3は口縁部を欠く。小型の壷であろうか。遺存高12.8cm、胴径10.6cmである。調整は外面中位以下が横方向のケズリ、それより上はナデ、内面はナデである。内面に粘土の接合痕がみられる。1号墳西側の出土である。4は高杯の口縁部の破片である。調整は器面風化のため不明である。弥生後期のものであろう。土坑2の出土である。

Ⅳ. ま と め

1．墳墓の築造時期について

1号墳については周溝内から数点の土器が出土している。井上裕弘氏の編年（井上 1991）を参考にそれらをみてゆくと、まず1（Fig.9 以下同じ）は小型の壷で粗製の感を受ける。井上分類では壷L_2に相当し、その器形から古墳前期5式に属するものであろう。2は高杯Qに相当し、脚部がまだ円筒状であることから古墳前期4式に属するものであろう。3は小型丸底壷で壷L_3に相当し、古墳前期4式と思われる。5は二重口縁壷で壷C_4に相当する。口縁屈曲部にシャープさがなく、あまり肩が張らない器形であることから古墳前期3式のものであろうか。以上見てみると1号墳出土土器は古墳前期3式～5式に納まるものといえる。次にその出土状況をみると1は周溝底から浮いて正立して出土していることから、周溝がある程度埋まった時点で置かれたものであろう。2、4は周溝底から正立して出土していることから、周溝が埋まる前に置かれたものであろう。3、5は周溝底から浮いて転倒して出土していることから、周溝が埋まる過程で墳丘側から転落したものと考えられる。このことから2、4は周溝墓の築造時かあるいはそれに近い時期のものであると考えられ、本墳の築造時期は古墳前期4式期と考えられる。5については3式ものと思われるが3と供伴すると考えられ時期的には4式期となるであろう。3、5についても2、4と同様の時期に置かれたものが転落したものではなかろうか。また1の出土状況から古墳前期5式期までは本墳の存在が人々に意識されていたと考えられる。4は時期の判断に苦しむが、その出土状況から2と供伴と考えて間違いないことから古墳前期4式と考えられる。

2号墳については伴出する土器が無いため築造時期の判定がしがたいが、その占地からみて1号墳よりは遅れるものと考えられる。なお本墳の主体部は地域が異なるが柿原古墳群C－21に類似し、その分析を行った中間研志氏（中間 1986）によれば池の上Ⅱ式期（4世紀末～5世紀初頭）と考えられている。

（引用文献）

井上裕弘　1991「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」『児嶋隆人先生喜寿記念論文集　古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念事業会

中間研志　1986「Ⅳ－B．竪穴式石室・石棺系竪穴式石室」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　　柿原古墳群Ⅱ』 福岡県教育委員会

2．方格Ｔ字鏡について

１号墳から出土した（註１）鏡は方格Ｔ字鏡（註２）と呼ばれるもので松浦宥一郎氏（松浦 1983)、高木恭二氏（高木 1991）による詳細な分類・研究がなされている。本例は松浦分類によるとＳＡ(１)式、高木分類によると鏡群２３(Ｂ)となる。方格規矩鏡のＴ、Ｌ、Ｖのうち L、Ｖを欠くこの種の鏡は日本では50例が知られている（註３)。しかし、細かく見るとかなりバライティーに富んでおり、分類はかなりの数にのぼる。逆に言えば方格とＴ字を残し、Ｔ字の両側に円座乳を配置するということのみがこの鏡の規格であり、その他については自由に作られたといえるであろう。このことからこの鏡はある特定の地域で製作され、一元的に配布されたというものではないと考えられる。これは鏡の分布状況から高木氏も指摘するところである。また、この種の鏡は４世紀後半から６世紀の古墳から出土しているが、本例はそのうちでも古い時期に属していると言える。その製作時期については高木氏によれば４世紀後半から５世紀初頭と考えられている。

方格Ｔ字鏡は言うまでもなく方格規矩鏡がその原型であるが、このように文様の簡略化された鏡は中国においてもみられる。簡化規矩文鏡と呼ばれるものである。孔祥星氏、劉一曼氏によれば中国における簡略化は新～後漢初期に幾何規矩文鏡の出現ですでに始まっており、後漢初頭～中期には簡化規矩文鏡が出現し、後漢中期～晩期にかけて盛行すると言う(孔・劉 1991)。簡化規矩文鏡には焼溝20号漢墓出土例（中国科学院考古研究所編 1959 図七四甲－４）のようにＬ字のみを欠くものや広州5039号漢墓出土例（中国社会科学院考古研究所編 1981 図二七七－７）のようにＬ、Ｖ字を欠くもの、広州5028号漢墓出土例（前掲 図二七七－６）のようにＴ字の横棒のみが残るものなどがある。中国における簡略化はＴ、Ｌ、Ｖのうちその一種ないし全て、あるいは方格を欠くもの等日本の在り方とは趣を異にするようである。このことから方格Ｔ字鏡は中国の簡化規矩文鏡の流れを直接に汲むものではなく、高木氏が言うように中国鏡の影響を受けつつも基本的には日本独自で変化していったものであろう。

(註)

1　平成３年、前原市荻浦立石１号墳より方格Ｔ字鏡（直径 9.2㎝）１面が出土している（岡部 1992)。

2．松浦宥一郎氏の提唱による。

3．垣内　章氏の御教示による。

(引用文献)

岡部裕俊　1992『荻浦の文化財』　前原市教育委員会

孔祥星・劉一曼　1991『図説　中国古代銅鏡史』高倉洋彰・田崎博之・渡辺芳郎訳

高木恭二　1991「博局鳥文鏡の系譜」『三島格会長古希記念　交流の考古学　肥後考古第８号』
肥後考古学会

中国科学院考古研究所編　1959『中国田野考古報告集　丁種第六号　洛陽焼溝漢墓』洛陽区考古発掘隊
中国社会科学院考古研究所編　1981『中国田野考古報告集　丁種第二十一号　広州漢墓』広州市文物管理委員会・広州市博物館
松浦宥一郎　1983「いわゆる仿製方格T字鏡について－桑57号墳出土の一面の小型仿製鏡を追って－」『小山市史研究　第5号』

Tab. 2　出土土器観察表

挿図	番号	出土位置	器形	色調	胎土	調整	焼成	口径	胴径	器高	備考
Fig・9	1	1号墳周溝	小型壺	赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	口縁内外面横ナデ 胴部外面ハケ 胴部内面ケズリ	良好		15.7	(15.6)	器面風化
	2	〃	高杯	〃	〃	脚部内面ケズリ（屈曲部以下はのちナデ） その他不明	〃			(12.6)	外面風化、調整不明 脚裾部下面黒褐色
	3	〃	小型丸底壺	〃	〃	口縁内外面ハケ 胴部内外面ナデ	〃	9.4	8.3	7.1	
	4	〃	鉢	淡赤褐色	長石、石英、雲母の微～粗粒砂含む	口縁内外面横ナデ 体部外面ケズリ 体部内面ハケ	〃	15.3		6.7	外面風化
	5	〃	二重口縁壺	外 淡赤褐色 内 黒褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	口縁内外面ナデ 胴部外面ハケ 胴部内面ケズリ	〃		26.3	(16.2)	
Fig・13	1	2号墳西南	二重口縁壺？	淡黄褐色	〃	内外面ナデ	〃				弥生時代後期?
	2	〃 石室東側	甕？	暗赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	内外面横ナデ	〃				外面スス付着
Fig・16	1	土坑2	甕	〃	〃	内外面ナデ	〃			(4.9)	
	2	〃	二重口縁壺？	赤褐色	〃	〃	〃				外面風化、弥生時代後期?
	3	1号墳西側	小型壺？	外 暗赤褐色 内 暗褐色	〃	胴部外面上半ナデ、下半ケズリ 胴部内面ナデ	〃		10.6	(12.8)	
	4	土坑2	高杯	赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微粒砂含む	不明	〃				器面風化 弥生時代後期

V. 付　　論

東真方古墳群C群出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター　本田光子
宮内庁正倉院事務所　成瀬正和

東真方古墳群C群1号墳と2号墳の石棺内の埋土に認められる赤色物について、顕微鏡観察とX線分析により、その種類と状態について調査した。試料の一覧と分析結果およびそれに基づいて推定される赤色顔料の種類を表に示した。

試　料

赤色物の出土状況と試料の採取位置は本文、図表を参照されたい。各採取位置につきコンテナ1～2箱の土であり、その中から赤色の濃い部分を抽出した。各試料とも、赤色部分は全体に拡散しており量的にも非常に少ない。しかも、赤色物だけが凝集した小塊は皆無で、土が淡く染まったような状態である。比較的赤色の濃い部分を選び、できるだけ土砂を除いたものから、針先に付く程度の量を採り検鏡試料を作成し、残りを研和してX線分析の試料とした。

顕微鏡観察

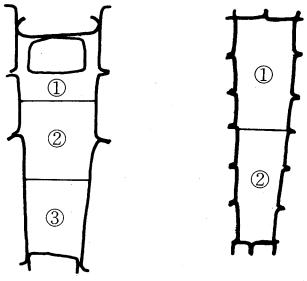
光学顕微鏡により透過光・落射光で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の赤色顔料としてはベンガラ（酸化第二鉄）、朱（硫化水銀）、鉛丹（四三酸化鉛）の3種が考えられるが、三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により見極めがつく。今回の試料は赤色顔料だけが凝集した小塊がないことからもわかるように、全試料とも、ほとんどは土砂の粒子の表面に赤色顔料粒子がまぶされている状態である。また赤色顔料粒子も微粒であるため、その種類をはっきりと判断することが難しい。全試料とも、赤色顔料としては微量ではあるが、形状と色調からベンガラ？かと見られる粒子が認められた。No.4にはベンガラ？以外に、やや大粒で透明感のある朱？かと見られる粒子に微粒のベンガラ？がまぶされたと見られるものを認めた。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施した。理学電機工業㈱製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40KV、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；10～65°、走査速度；2θ8°／分、時定数；0.5秒の条件で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としてはNo.5に鉄と水銀が、その他の試料には鉄のみが検出され水銀は検出されなかった。全試料

No.	試料の採取位置	顕微鏡観察	蛍光X線分析		X線回折		赤色顔料の種類
			鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂	
1	1号墳　石棺埋土①	ベンガラ？	＋	－	－	－	ベンガラ
2	1号墳　石棺埋土②	ベンガラ？	＋	－	－	－	ベンガラ
3	1号墳　石棺埋土③	ベンガラ？	＋	－	＋	－	ベンガラ
4	1号墳　石棺内A	ベンガラ？	＋	－	－	－	ベンガラ
5	1号墳　枕右下	ベンガラ、朱?	＋	＋	＋	－	ベンガラ、朱
6	2号墳　石室上層	ベンガラ？	＋	－	＋	－	ベンガラ
7	2号墳　石室埋土①	ベンガラ？	＋	－	－	－	ベンガラ
8	2号墳　石室埋土②	ベンガラ？	＋	－	－	－	ベンガラ

＋：検出　　－：未検出



1号墳　　2号墳

試料採集位置について

1号墳

石棺埋土……石棺内埋土については左図のとおり全体を3分割して採集した。

石棺内A……床面に敷かれた暗赤褐色土である。

枕 石 下……枕石下の試料である。

2号墳

石室上層……石室が破壊された際の撹乱土層である。

石室埋土……石室内埋土については左図のとおり全体を2分割して採集した。

とも鉛は検出されなかった。この他、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されるが、それらはみな主として混入の土砂部分に由来するものなので、省略した。ただし、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。

X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として実施した。理学電機㈱製文化財測定用X線回

折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25KV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4㎜、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；30～66°、走査速度2 4°／分、時定数；2秒の条件で測定を行った。表には辰砂（Cinnabar赤色硫化水銀）、赤鉄鉱（Hematite酸化第二鉄）の有無のみについて記した。赤色顔料の主成分鉱物としては、No.3、5、6に赤鉄鉱が同定されたが、辰砂はどの試料からも検出されなかった。この他、石英、長石などが確認されたが、それは主として混入土砂に由来するものなので、省略している。

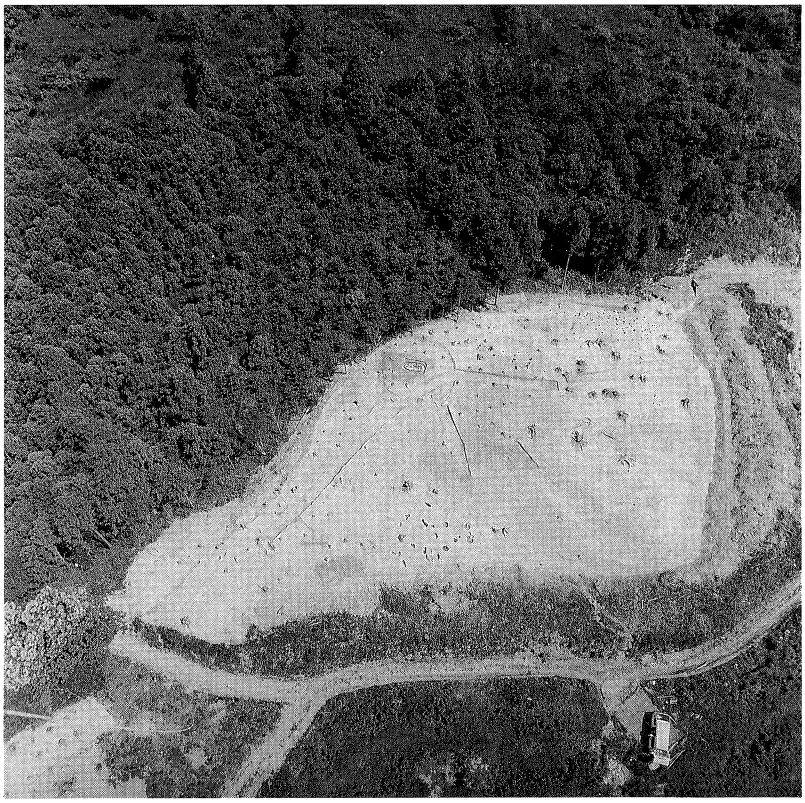
まとめ

以上の結果から推定される赤色顔料の種類を表に示した。

検鏡でベンガラ？、蛍光X線分析で鉄、X線回折で赤鉄鉱が確認されたものはベンガラである。X線回折で赤鉄鉱が検出されなかったものについては、試料に含まれる赤色顔料の絶対量が少ないとX線回折では赤色顔料に由来する鉱物が検出できない場合が多いので、検鏡結果と蛍光X線分析により水銀の検出されなかったことから、赤色物をベンガラと推定した。同様に、No.5についてもX線回折では辰砂が同定されなかったが、検鏡で朱？、蛍光X線分析で水銀が検出されているので、朱が含まれていると推定した。

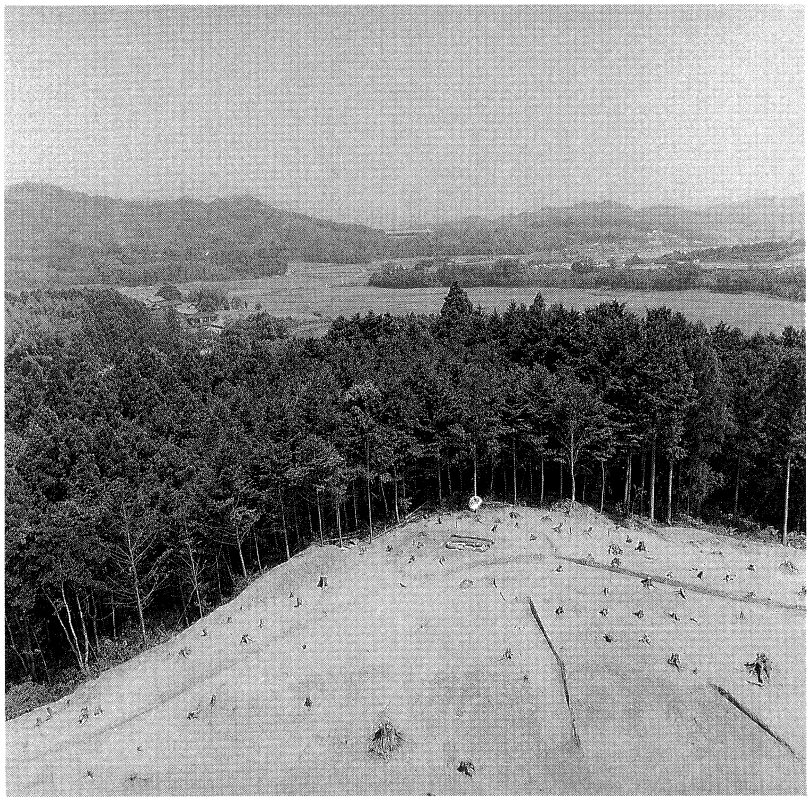
1号墳石棺ではおそらく頭部に小量の朱が施され、遺骸全体にベンガラが、2号墳では全体にベンガラだけが使われていたものと考えられる。ベンガラの量も多くはなかったと思われる。

PLATE



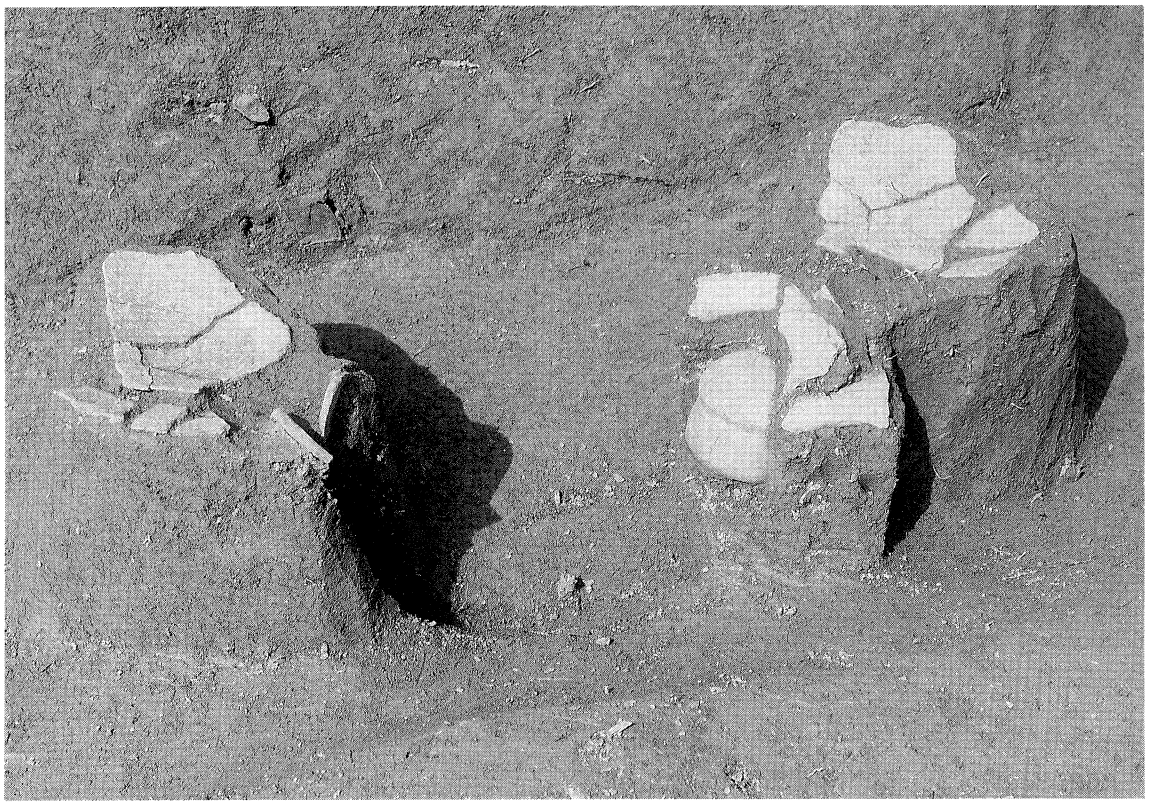
a．遺跡全景Ⅰ（南から）

b．遺跡全景Ⅱ（南西から）



a．1号墳全景Ⅰ（南から）

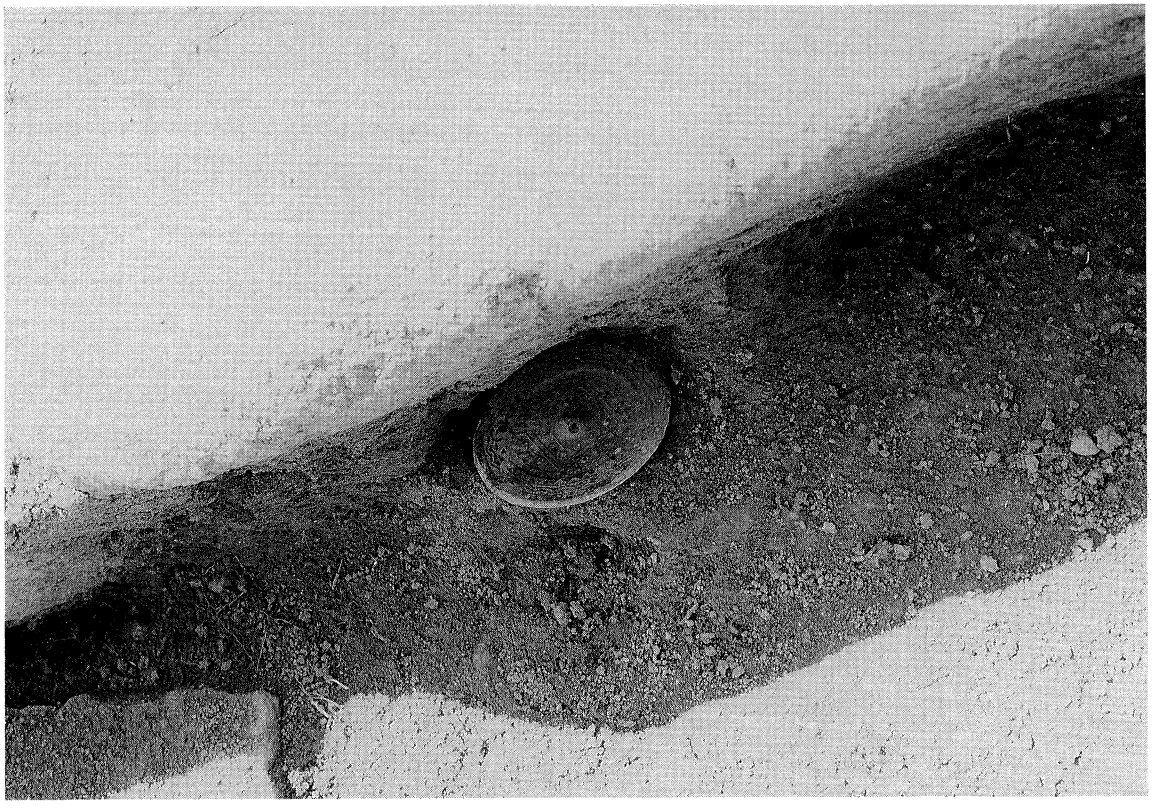
b．同 上 Ⅱ（上から）



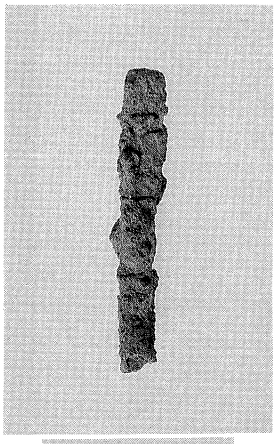
a．周溝内遺物出土状況II（土器3.5 南から）

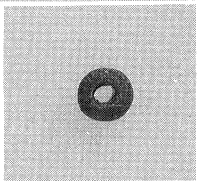
b．同 上 III（土器2.4 南から）

a．方格T字鏡出土状況Ⅰ（西から）

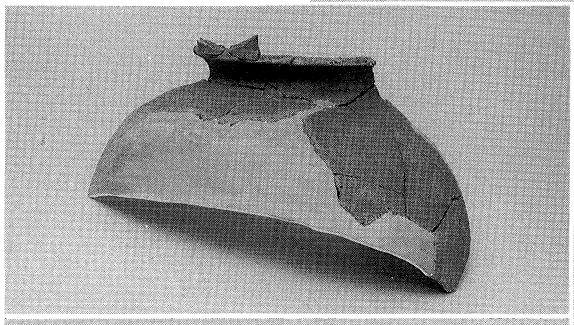


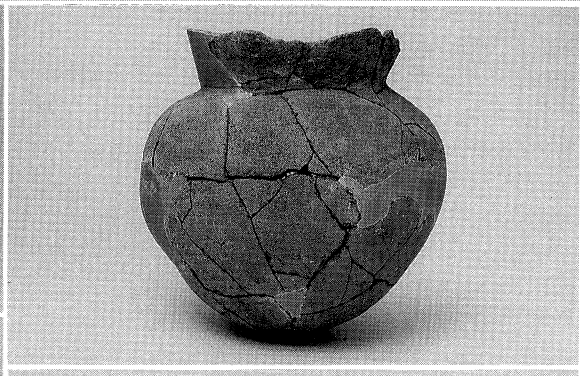
b．同 上 Ⅱ（近景 北から）

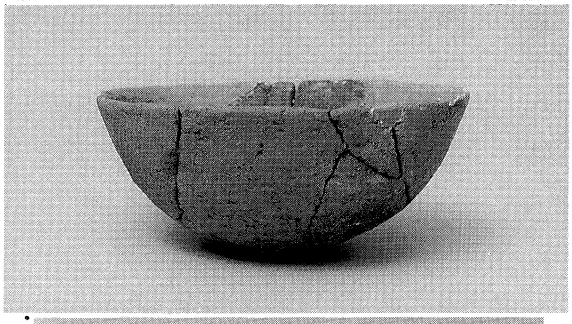


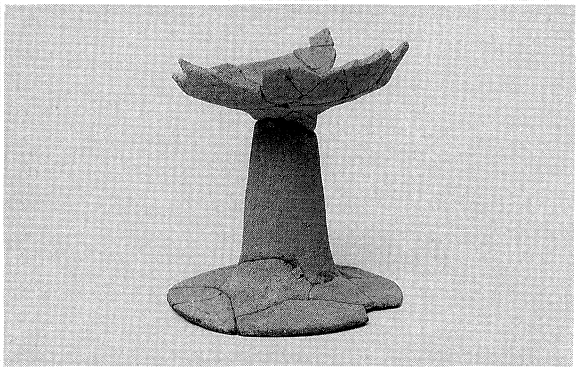


主体部出土

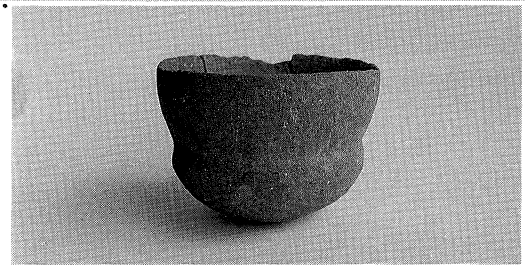




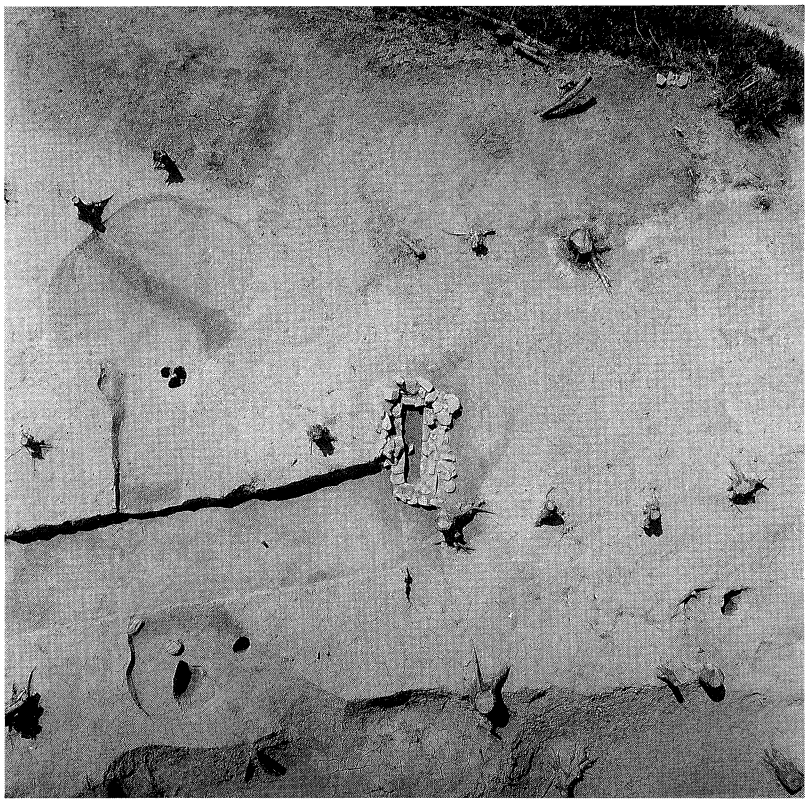




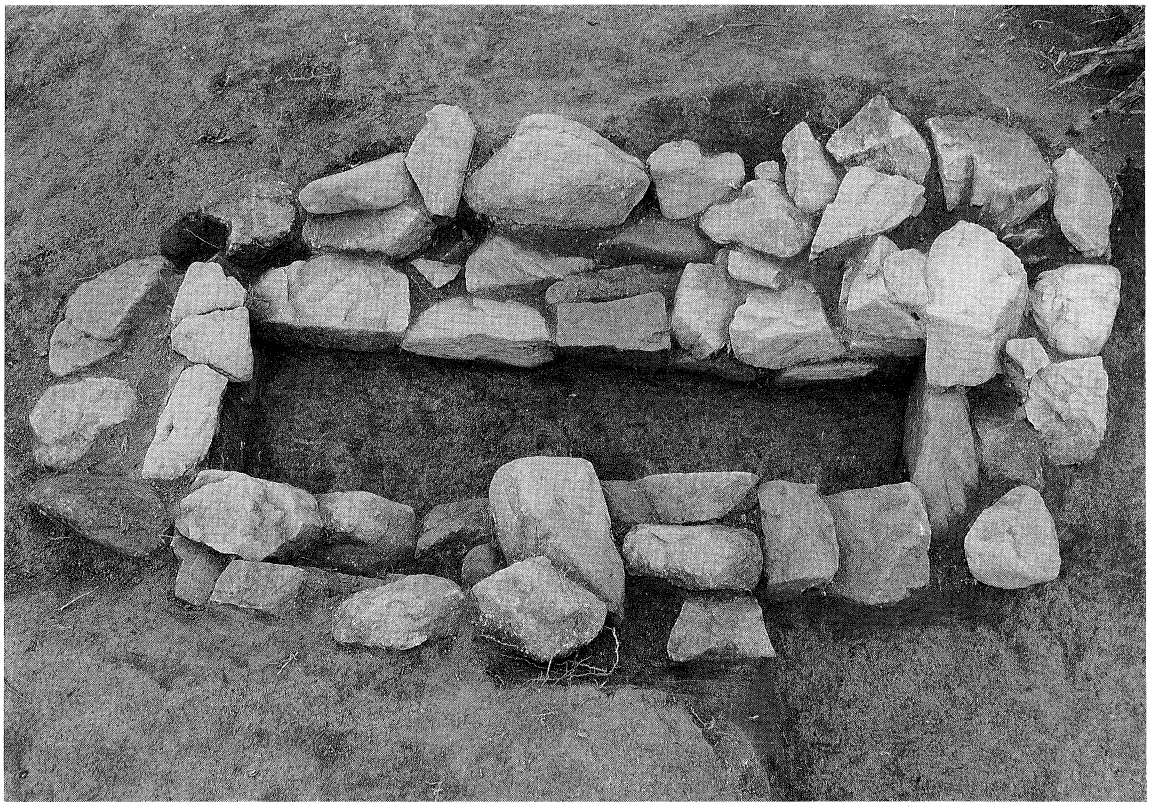
周溝出土



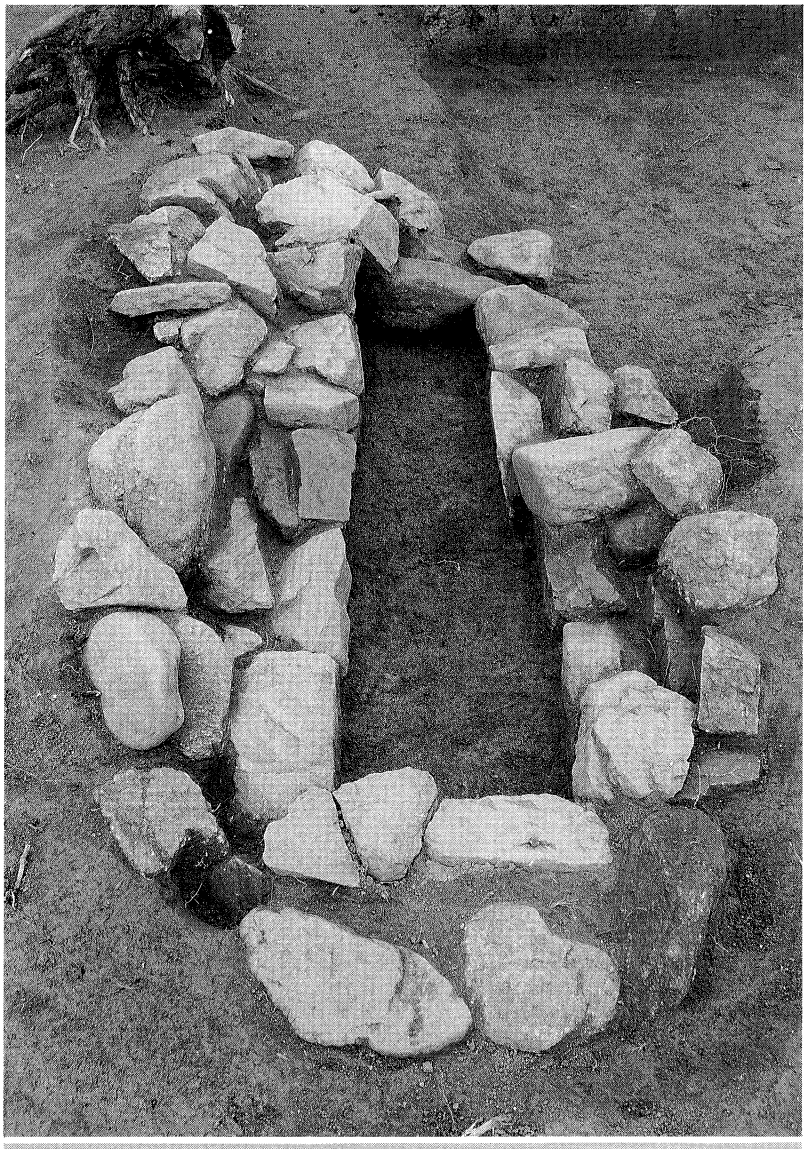
1号墳出土遺物



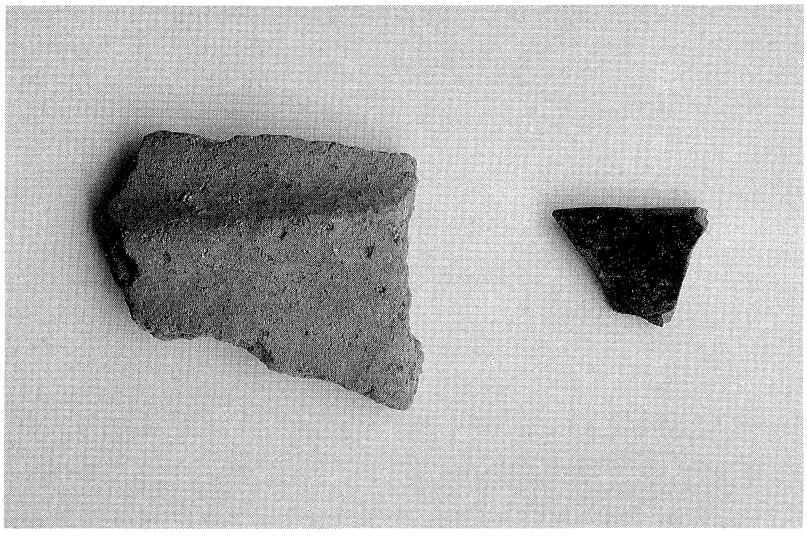
a．２号墳全景（上から）



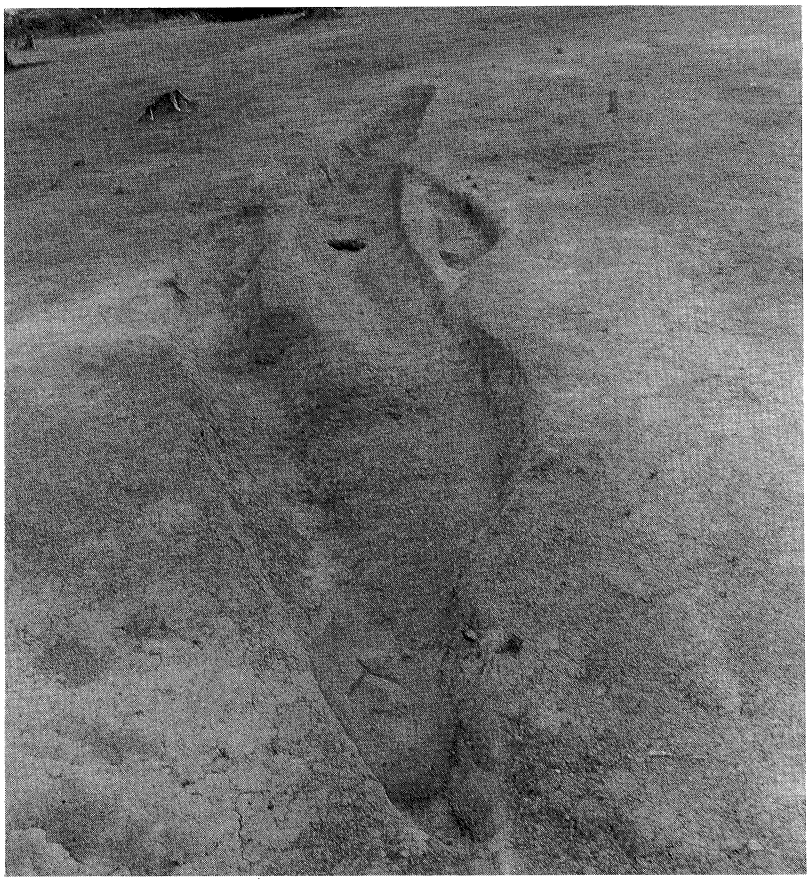
b．２号墳主体部Ⅰ（南西から）



a. 2号墳主体部II
（南東から）



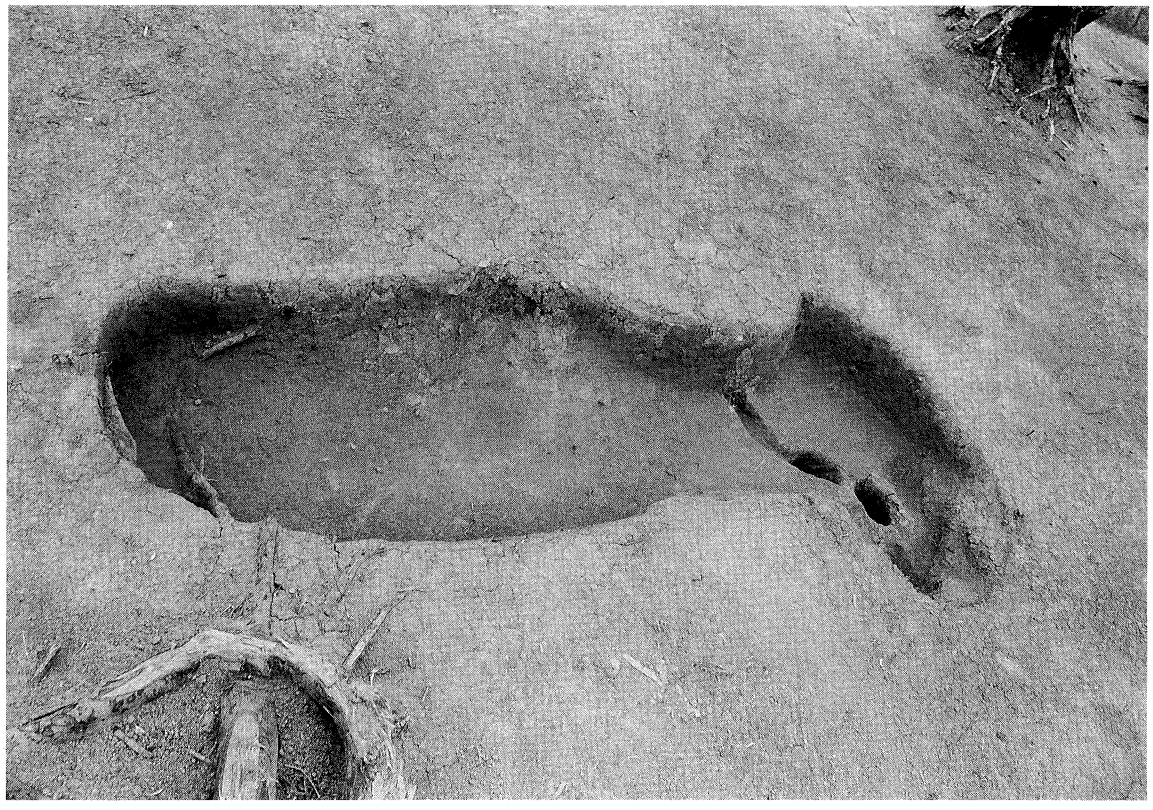
b. 2号墳出土遺物



a. 溝

b. 土　坑2

a. 土　坑3



b. 土　坑4

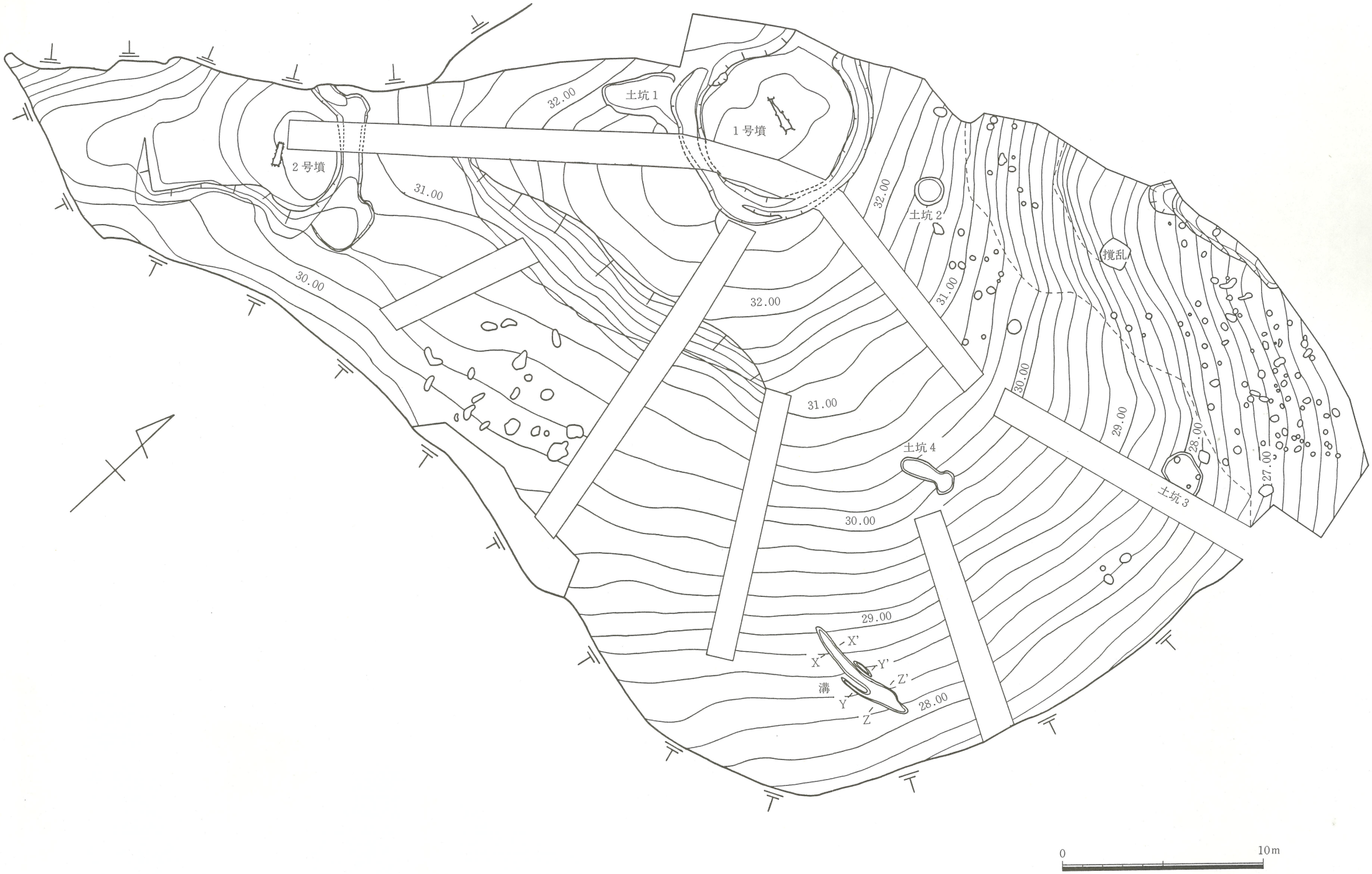
今宿バイパス関係
埋蔵文化財調査報告Ⅳ

前原市文化財調査報告書
第 48 集

平成 5 年 3 月 31 日

発行　前原市教育委員会
福岡県前原市前原 623

印刷　株式会社　津村愛文堂
福岡市早良区室見 2 丁目16－ 8
電話 092（821）0173



Fig① 調査区全体図 (1/200)